
勇者早く来て!!!

あおい猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者早く来て!!!!

【Nコード】

N9546H

【作者名】

あおい猫

【あらすじ】

ある日突然魔王と名乗る存在が大地を闇に染めた。抗えぬ人々は、怯え逃げ惑うしかなかった。しかし、神の力を借りた勇者が魔王と争いそして倒すのだった。しかし、魔王という存在はなくならず封印を施す事にする。神の力を使いその地に魔王の封印を施し、脅かす存在がいなくなり生命溢れる大地へと変貌させていった。そして、数百年の月日が流れ魔王という言葉すら忘れ去られようとした日の事であった……。

第1話：偉大なる預言者にして天才魔導師の弟子A（前書き）

これはフィクションでありファンタジーっぽいストーリーです。

激しいバトルなどをご希望な方には沿わないと思います。

どちらかといえば、コメディーを主体とした構成になるとも想われますのでそのつもりでご容赦下さいませ。

勇者と魔王、ありきたりな話ではありますが皆様が楽しめるよう精一杯書き上げていきたいと思えます。

第1話：偉大なる預言者にして天才魔導師の弟子A

この物語は！

魔王を討伐するためにある国が勇者を選定し、その勇者に世界の命運を託し切磋琢磨し苦難に満ちながらも仲間達と協力し魔王を退治するまでの話である。

ある日

ウトキテ国にこの人ありとまで呼ばれ、王室からも信用信頼を得ている偉大なる預言者にして天才魔導師が齢156歳で亡くなった。そして遺品整理も兼ねて偉大なる預言者にして天才魔導師の弟子Aが師匠である預言者の部屋の掃除をしていた。

弟子Aは弟子の中でもAを関するほどに優秀でかつ一番弟子であった。

そんな弟子Aが、その時ふと机を見ると本が一冊放り出されていた。そのタイトルは日記帳であった。

机を拭く際に、邪魔になるため日記帳をどけようとし誤ってその本を落としてしまう。

これが全ての始まりだった……。

その落ちた本が開き、その一文が目に入った。

XXX年○月×日

125年8月31日が終わる時――

魔王が復活し闇が全てを覆い尽くしこの世界は滅びるだろう。

by 偉大なる預言者にして天才魔導師

あらゆる物語はほんの些細なきっかけから始まるものだ。
そして、始まりあれば終わりあり。

弟子Aは、この時一種の予感を感じてたのかもしれない。
この物語を紡ぎだしたのは自分であつたという事に――

この日記帳を見つけた偉大なる預言者にして天才魔導師の弟子A
は焦った。

何せ焦った。超焦った。

そりゃそうだろう。日記帳とはいえ、こんな一文が載つたものを
見つけては、王室へ報告しなければならぬからだ。

弟子Aは急いで謁見を申請し、そしてその機会を得た。

弟子Aという事もあり王室には師匠と共に何度も出入りしており
割とあつさりで行けたのだった。

ちなみにその時、対応した兵士曰く……。

「あれはヤバイ。人がするような顔じゃなかった。まるで鬼のよう
だった」

と、告げている。急いであるあまりか、その迫力に負け通してし
まったんじゃないかと思える。



豪華にして荘厳なる一室、圧倒的な迫力を備え王座に構えるはウ
トキテ国4代国王である。

白く長髪の髪に立派な白い髭を蓄えた老人と呼ぶにはまだ早くだ
が若いとも言えない国王の口が開く。

「……久しい顔だな」

少しの間をおくと、じっと国王がこちらを値踏みするような目で

見ながら、言葉を発する。

周りの家臣たちもこちらを監視するような、厳しい目つきで見ている。

「（むう、さすがに王の御前。兵士達のこちらの一举一動を注視する様はさすがだなあ……）」

心の中で任務に励む兵士達の士気、忠実さに思わずそう心で呟く。

「ハッ、実に一年ぶりにございます」

師匠と共に城へ出向いたのは、一年前が最後であった。

「ふむ。そうだったかな……まあよいわ。して此度は何のようだ？」

威厳たつぷりに、用件を促す。弟子Aは、持参してあった日記帳という名の預言書を脇に抱えてあったので、それを国王へと差し出すために大臣に一旦預ける。

本を受け取ると、大臣は国王に近づき、その本を国王へと預けられる。

形式とはいえ、面倒なやりとりであると思う。

「この本の最後のページをご覧ください」

促されるまま国王は、そのページを見て……驚愕していた。

「なんだと……これは！これは一体どういうことだ！！」

テーブルがあればそのまま、本ごと手を叩きつけてしまうように声を上げる。

側近達は普段見せない国王の一面を垣間見た。

激昂し、地団駄を踏んでしまいそうなほどに暴れそうな様子だ。

周りの兵や大臣もこれには驚いた。一体あの冷静で威厳を保った王をあそこまで豹変させてしまう内容が何なのか、疑問は尽きなかった。

「ハッ、これは我が師が綴った一文であります（日記帳だけど……）」

寒さからか、王のあまりの威圧感からか身震いをしながらもはっきりとそう告げる。

「つまり、あの偉大なる預言者にして天才魔導師にして我が友でも

あつたあやつの……」

「その通りでございます」

「そうか」

「……」

弟子Aや事情を知らない家臣たちは次の言葉を待った。

「いやいやいやいや……」

なにやら国王の様子がおかしい。

「（進化でもするのだろうか。そうしたら国王はグレード国王とか……？）」

どうでもいい事を思いつきながら顔を伏せ言葉を再び待つ。

「王……？」

大臣が不安そうに様子を伺う。

「いやいやいやいや……何よこれ。ねえ、何これ？この年月日、弟子A見た？見たよね？しっかり見たよね？」

「ハッ、左様でございます」

「おいしい！？おまつ、これおまつ、後二週間ぐらいしかねえーじゃねーかー！」

この日、王は激怒しすぎて倒れ寝込んだという。

以降は大臣が指揮を引き継ぎ、弟子Aに魔王を倒せる勇者をすぐさま探すよう指示を出す。

その折に、弟子Aはウトキテ国から軍資金と装備一式を得る事となる。

国からの軍資金は140G ゴールド

木の杖、布の服のみだった。

武器…なし↓木の杖

防具…なし↓布の服

資金…2100G↓2240G

貨幣価値は、宿屋1泊10Gで薬草も10Gほどのものだ。

だが……

師匠の日記帳になぜあの内容だった事よりも！

弟子Aは魔王を討伐するまでの期間が2週間という事よりも！

勇者を探せと命じられた事よりも！

軍資金、装備が貧相だったという事よりも！

資金が既に有り余っているという事よりも！

今まで弟子Aは装備欄をみて愕然とした……。

裸だったという事に最もショックを受けたのだった。

あまりの衝撃の事実により弟子Aは更にテンションが下がっていった。

「……何で裸やねん」

弟子Aは生まれて初めて西の国の共通語と言われる言葉でぼそりと呟き、誰も居ない町の外まで無言で歩いた後。

涙をぽろりと流すのだった。

此度125年8月16日

午後2時を過ぎた頃であった。

世界が闇に覆われるまでのタイムリミット…二週間ぐらい

第1話：偉大なる預言者にして天才魔導師の弟子A（後書き）

第1話に相当するお話です。

勇者に魔王、そしてほのぼのの愉快的仲間達。

商人の物語を書こうとしたら、どうしてこうなった!?

というわけで、いずれ出るだろうキャラクター達に個性を持たせ楽しい内容と完結できるよう頑張りたいと思います。

第2話：弟子Aの旅の始まり（前書き）

第2話になります。

なんと登場人物が増えるのでお楽しみ下さい！

第2話：弟子Aの旅の始まり

この物語は！

魔王を討伐するためにある国が勇者を選定し、その勇者に世界の命運を託し切磋琢磨し苦難に満ちながらも仲間達と協力し魔王を退治するまでの話である。

街に出た弟子Aは、あまりのやりきれなさに絶望していた。

なんせ全裸だったのだ。そういえば城に入ってから、弟子Aを見てはひそひそ。

謁見の時はなぜかこちらを監視し続けてたのは、弟子Aが全裸のためだったという事だった。

「いっそもう滅べよ、全裸で本だけ持って街中を急いで走ったボクの記憶を持った奴何か皆滅べよう。てか……全裸で街の中移動してたとか、どんだけだよ。何で誰も突っ込まないんだよ。何で気付かなかったんだ。ボクは」

四つん這いの形になり、拳を握り地面を思いっきり殴りつける。やり場のない怒りに暴れたかった。だが、そんな時、視線の先に影が見えた。

既に午後二時から随分といぢけてたために、何時の間にやら0時を過ぎていた。

こんな時間に街の外に出る奴は少ない。

この世界では、モンスターという物が出る。魔王もいるしだいたいそんな感じだ。

比較的街周辺のモンスターという物は、弱く脆弱ではあるものの一般人にとっては脅威であった。

だが弟子Aは偉大なる預言者にして天才魔導師の弟子だ。弟子オ

ブ弟子の名を関するぐらいの弟子だ。故にそれなりの実力がある（自己申告）

そしてそんな弟子Aが心の中で断じる。

目の前のモンスターが脆弱であるはずの周辺モンスターで放つような殺気ではなかった。

尋常じゃない圧迫感と危機感が自身に告げる。

目の前の影は人ではない。敵（仮）であると。

モンスター（仮）であると判断し、それを認識できた。

弟子Aは、それなりの実力に加え頭の回転も中々に良い。伊達に酔狂で一番弟子で全裸じゃなかったのだ。

「関係ないよ！？ 全裸は！」

それが、魔術の発動キーになった。

「なっちゃうの！？」

目の前のモンスターだろうに大きな火の弾がぶつかると、熱気と火の粉が弟子Aにまで届いた。

既に四つんばいの姿勢から、熱に焼かれないよう急いでその場から離れる。

「やった……？」

風格ある魔導師の顔つきで（全裸ではない）決して言うてはいけない言葉を紡ぎながらモンスター（仮）を見る。

闇夜の中、月と未だ燃え続ける炎が照らす。

「クッククック」

「なにゅ……！」

噛んだ事はスルーして事態の把握に、風格ある顔つきを崩さぬよう努めた。

弟子Aが唱えたのは、下級魔術とはいえそれなりの威力を秘めた火の弾だ。

少なくともこの周辺で、それに耐えうるモンスターなど存在するはずがない。

何せまだ、城壁が見える程度の距離しか離れていない。

「今宵は冷えると思ったが、なかなか親切じゃないか人間よ」

「……」

火が消えその中から人のような影が出てくる。

だが、先ほどの言葉からも察するに、彼か彼女かは分からない人物はおそらく人間ではないのだろうと確信する。

先手を取る時のためにも再度魔術を放てるようにする。

だが、それは無駄に終わってしまった。その姿を見た時点で声を荒げ構成を編み上げていた魔術が霧散する。

「なっ、お前は……!？」

「フハハハッ、知っているのか？ このオレを？ ならばその言葉を紡ぐといい」

その先には死が待っているがなと続けて……。

「ゼ……」

「ククッ、余りの驚きで言葉も紡げぬか？ ククッ、いきなり炎を浴びせるほどの人間だからどれほどのものかと思えばツマラン。所詮貴様もタダの人間なのか」

目の前のソレは人間ではなかった。

溢れんばかりの殺気と不敵な笑みを浮かべている。

隆々としている筋肉は既に鎧と形容しても差し支えないだろう。

全身が紫色をしており額には第三の目、巨大な角が生えた。まさにバケモノだった。

「ゼ……ゼ……」

あらゆる衝撃が貫いた。物理的にではなくそう感じた。

なぜこのようなのが目の前に居るのか。

なぜこのようなバケモノが居るのか。

理解できない、理解できないとそう頭の中でエラーを吐く。

「紡げぬようだな……まあいいわ。貴様は今宵の宴の始まりだ。ならば我が名を聞かせてやろう。我はゼ「全裸の変質者だあああ！！！」えっ！？」

何か言おうとしてたがそんな事は関係ない。

そう全裸だった。

「やばい。これはやばい。こんな誰も居ない所で、こんな筋肉がピクピク動かせそうなバケモノに捕まれば確実に、ピーでピーになってピーされるに決まってる！」

あまりに、焦りすぎて弟子Aは自分自身で、最高の魔術を展開しそして発動される。

偉大なる預言者にして天才魔導師から教わった禁忌にして最高の魔術を目の前の敵に狙いをつけるため杖を持ちながら片手を突き出す。

その間相手はなぜか、

「えっ！？おい！待……！」

と、かなり焦っている風であり、言葉の続きが発せられる前に命と同じぐらい大事なものを守るため躊躇なく放つ。

何もない空間から生み出された巨大な閃光がバケモノを飲み込む。それは聖なる光【ホーリー】と呼ばれるソレだった。

ありったけの魔力を注いで使ったソレは、例え相手が伝説級のドラゴンであろうと何であろうと、粉碎玉碎思わず大喝采してしまうほど威力がある。と師匠は言っていた。

難点を言えば、コレを使うと魔力が空（M P O 状態）になってしまうという事だ。

故に一撃必殺。これはずせばもう後がない。

体力もかなり使っていたみたたく汗もだらだらになりその場にへたり込んでしまう。

煙が黙々と上がり続け、回りどころか空も見えない。

「もー、炎の弾一発も撃てないや……」

彼は熱しやすく冷めやすいタイプであった。

先ほどまで激昂していたのにも関わらず、すぐに冷静になれるのは自分自身利点とも考えていた。

なぜ熱しやすくなるなくする方法を考えないかはまた明日考えよう。

少しだけ一休みしてる間に、煙は晴れ月夜が目に入る。

立ち上がり、バケモノの被爆地に目を向ける。既に息絶えてるのかまるでヤ○チャのような格好で倒れこんでいた。

「姿形も残さないって師匠言ってたのに……だがあの様子なら大丈夫かな」

一瞥だけくると、明日、城の衛兵にでも処理させようと考えながら来た道を引き返し始めた。

「しかし、初日でこんな状態じゃ勇者探し何て無理だよ……宿に戻ろう」

がつくりと、うな垂れながら歩こうとして気付いた。

足が動かないのだ。

「あれ……あれえ？」

いやな予感しかない。

「うーん……こりゃしょ！鈍ったのかなあ」

とぼけてみるが、視線が足に向けない。怖すぎて。

あ、何か足痛いな。こうぎゅって掴まれてる感じがしている。

仕方なしに、視線を足に向けると手があり、少し後ろに視線を向ける。

ニヤリ。

目が合う。汗が余計に吹き出る。

「……まだ、慌てるような時間じゃない」

落ち着け、落ち着くんだった自分。素数を数えるんだ。

「やってくれたな人間」

全身ぼろぼろになりながらあのヤ○チャの姿勢でこちらまで身体を引きずりながらやってきたのだ。

しかし、その声は威圧的でありその姿とは裏腹に、未だバケモノとしての貫禄を抱かせるようであった。

「やってくれたな、実にやってくれたな。我が身体に傷どころか重症を与えるとは……」

地獄からの呼び声。まさにそれであった。

あらゆる恐怖が呼び起こされ、走馬灯が流れ込んでくるようだ。

「だがな、我を仕留め切れなかったのが運の尽きだ。一つ忠告をしておこう」

息を呑む。のどを鳴らす音が聞こえるようだ。

「いや訂正か。貴様はタダの人間ではなかった。だから貴様はココで我が眷属となるがいい」

「何っ……」

全ての言葉を紡ぐ前に意識が遠のく。

ああ、何て無常なんだろう……。

出発してすぐにまさか訳の分からないバケモノに出会いそして眷属とか……。

そして弟子Aの意識はブラックアウトした。

此度125年8月17日

午前0時を過ぎた頃であった。

世界が闇に覆われるまでのタイムリミット…二週間ほど

第2話：弟子Aの旅の始まり（後書き）

というわけで、初日にしてとんでもない事態に巻き込まれた弟子A！
敵の正体は一体何なのか！そして書き直す前にネタバレしてしまっ
て申し訳ない。

予想は付くようで付かないかもしれませんが続きをお楽しみくださ
いませ！

第3話：弟子Aの苦難（前書き）

第3話がついに完成しました。

しかしサブタイトルが地味に苦労しますね。

さて、第三話始まり始まり。

第3話：弟子Aの苦難

この物語は！

魔王を討伐するためにある国が勇者を選定し、その勇者に世界の命運を託し切磋琢磨し苦難に満ちながらも仲間達と協力し魔王を退治するまでの話である。はず。

弟子Aの目が覚めるとそこは天国だった。

「アハハ、ウフフ……」

周りは花畑のようで、亡くなった師匠が対岸で手招きしていた。旅が始まって数時間は無為に過ごし、そこから持ち直して数分。

弟子Aはこうしてここに辿り着いたのだ。

だからか既に抗う気力もなく、拒む理由すらなく、自分はその対岸へ行こうと川を渡る。

だが、存外に川は深く膝辺りまで水面が来ている事に気づいた時には遅く足を取られ川下へと流されていった。

「ふおっふおっふおっ、まだまだじゃのお。わしの所に来るには後10年早いわ、ふおっふおっふおっ」

「（いや、十年って。ボクまだ十八歳だし）」

何と衝撃の事実。弟子Aはピッチピチの十八歳であった。

もうひとつ付け加えれば、男であり。身長低い、容姿は幼い感じ、頭脳はそれなり、魔術の腕はそこそこ、体格も細い、力は見た目通り。典型的な魔術師タイプだった。

そして、彼女居ない暦は年齢と同じ。

だが、一つ言えばあくまで今は亡き師匠から見てのことだった。

既に水没してしまった弟子Aの淡白な突っ込みは、師匠に届かないだろう。

だがそれでいいのかもしれない。今はまだそこに辿り着くのは早すぎる。

まだ弟子Aの旅は始まったばかりなのだから――

―完―

「って、終わっちゃうの……あれ旅？ ……確か街から出て数十分の所に居たはず」

弟子Aの意識が混濁しているため、少しずつ心の中を整理する。

「いや、川？ あれ？ あれ？？ そう、バケモノの変態に襲われて……」

頭の回転が少しずつ明確に、そして早くなる。

「足を掴まれて……それから」

「お前を我が眷属にしてやったのだ。感謝しろ人間」

「そうそう眷属にされて……えっ」

視界と意識がはっきりとする。

飛び上がるようにして起き上がるそこは、戦闘を行ったその場所のままであった。

「ああ、なんだ夢かよ……夢オチかよ」

「いや」

「ああ〜耳鳴りが〜幻聴が〜」

「おい、貴様。我を無視するな」

「うーん、ワレワレハウチュウジンダァ」

まるで扇風機に向けて声を発してるかのような感じで言葉を発する。

決して聞こえない言葉が聴こえてるから誤魔化す訳ではない。そう心に念じながら目を瞑る。

「(きっと、この目を開ければ何もないはず。何もないはず)」

力強く、神に祈りをささげるかのように目一杯ありったけ心を込める。

ぱっと目を開けるとそこには、青い空。白い雲。何かが焼けた後。遠くに見える城壁。

そして自分以外には誰もいなかった。

「よし、賭けに勝った！」

やっぱり夢オチか。そう断言しようとした瞬間それは目に入った。「我を無視するなど言ったらうがああ！」

殴られた。顔面と左手に衝撃が走る。

いやいや、顔はともかく自分の左手に衝撃はおかしいでしょう。視線を左手に向けるとそこには……

「おいしい！　なんだよこれ！？」

「我が眷属にしてやったのだよ。人間。いや、正確には身体を乗っ取ったと言ったほうがいいか」

「手が、手がバケモノに！？」

左手があのだバケモノになっていた。コレは夢だと思いたい。

「誰がバケモノだ。我は魔王ゼ」「全裸の変態だろうが、この筋肉モリモリ変態バケモノが！」……」

遮るようにして言葉を発する。

相手はソレに対して何も言えなかったようにただ俯く様にうな垂れた。

さすがに少し、気が引けたが、こちらも左手がバケモノになってしまったなんて、他の人に知られたら、前科（全裸）と合わせて王や師匠に顔向けどころか、勇者探しすらままならない。

それに既に日が昇ってるということは、残り日数は確実に減っているという事だ。

だからこそ、こんな所で頓挫する訳にはいかなかった。

解除の呪文を高速で頭の中で搜索する。

「あれでもない！　これでもない！？」

「……」

左手の魔王は、さっきの一言が効いたのが一言も発していない。おとなしくしてくれるならそれがいい。解除の呪文を使い、手を

それぐらいに叫ぶ。

「お前が魔王……だと？」

「そうだとさっきも言ったぞ」

「いや、チェンジで」

それは全ての時を止めるのに十分な破壊力を持った一言であった。

此度125年8月17日

午後1時を過ぎた頃であった。

世界が闇に覆われるまでのタイムリミット…二週間切ったぐらい

第3話：弟子Aの苦難（後書き）

末文までお読み下さりありがとうございます。

弟子Aと何と新しい登場人物とは、魔王でした。

さて、タイトルの勇者は一体いつ来るのでしょうか？

まさに早く来て！！！な状態のわけですが。

予想などして、内容共々楽しんでくだされば幸いです。

では、次の話も完成次第投下したいと思います。

第4話：弟子Aと魔王と真実（前書き）

おはようございます。

形になりましたので、投稿させていただきます。

第4話：弟子Aと魔王と真実

この物語は！

魔王を討伐するためにある国が勇者を選定し、その勇者に世界の命運を託し切磋琢磨し苦難に満ちながらも仲間達と協力し魔王を退治するまでの話である。はずがだんだんと雲行きが……。

時が動き出すまでには、少し間があった。

先に言葉を発したのは、左手の魔王だった。

「クックククツ、やはり我が眷属となっても、我を恐れぬか、さすがと言っておこう」

さきほどまで、うな垂れていたのが嘘の様に、そう告げてきた。

「だが、それは無理な相談だな。貴様の放った禁呪のせいで元の肉体は滅びかけていたからな。だから貴様の身体を乗っ取ろうとしたのだが、力が及ばなかったのか左手だけになってしまったがな」

禁呪という気になるキーワードが出てきたが、この時ばかりはそんな事にも気が向かず、ただただこの状況を嘆いていた。

「一体どうしてこんな事に」

まさかココまで弟子Aは、自分自身不幸体質だとは考えてなかった。

確かに、この冒険の冒頭から全裸だったりはしたが、正直出だしが最悪の最悪、底辺だと認識していたからだ。

しかし、それをあっさりと覆し、バケモノと出会って数分で、それが実は魔王だったり、身体を乗っ取られるわ、魔術で精神力は使果たし、正直一日でこなすイベント数じゃないと断言できる。

「不幸にも、我と出会ってしまったことだろうか」

ククツと笑いながら魔王が言葉を漏らす。

その一言で少し冷静な思考が戻った。

「って、何で魔王たるお前がこんな小国まで来てるんだよ！」

当然の疑問だ。いきなりラスボスが、出発の地の街を出た1歩目で襲ってくるような状況だ。

しかも、一つ付け加えるのならば、その魔王に対し、有無を言わず手痛いダメージを負わせた弟子Aも、規格外ではあっただろう。「徒歩でだが？」

あっさりと、何当たり前の事を聞いているのだ？と言わんばかりに、見下した雰囲気をもし出していた。

「交通手段なんか聞いてない！ お前はバカか！」

そうだった。なぜ魔王が、ここまでわざわざ歩いて来たのか理由が知りたい。

ていうか、徒歩かよ。なぜ封印されたはずの魔王が、わざわざここまで歩いてきてるんだって話だ。飛んだりワープしたり便利な魔術もある。

誰でも使えるわけではない。とはいえ魔王とまで自称だが、言うのならば使えて当然クラスだ。と弟子Aは思っていた。

「バカとはなんだ。人間で言う所のバカと言った方がバカなのだぞ。これだから古い先短い種族はいかん。ゆとりを持って行動しろ。我に寿命は存在せぬ故、この世界を散歩がてら見て回っていたのだ」

「魔王が散歩とかお前は一体何なんだよ！」

「いや、魔王だって」

「（こいつはあ……！！）」

イライラが募るものの、何とか冷静になれと念じる。

「（K O O Lだ。K O O Lになれボク）」

C O O Lになりきれていない、弟子Aであった。

「だから、ここまで来て何をしようとしてたんだって事だ！ 宴がどうのこうの言ってたようだけど……」

今更ながら不思議なもので、弟子Aと魔王という構図は、傍から見たら大声で独り言を言ってるように見えるだろう。

なんせ左手が魔王なのだから。

誰も居なかったのが救いの一つだ。そしてもうひとつ、徐々にこ

の事態に慣れていつている自分が悔しい気もする。

「ああ、そういうことか。何、散歩でココまで来たのだが、自分の城の場所が分からなくてな。人里が見えたので場所を聞くついでに滅ぼそうかと」

「迷子！？ 魔王迷子なの！？ というか、迷子でついでに滅ぼすとか性質悪い！」

「だって、魔王だし？」

「うっ、確かにそうだが」

「まあよいではないか。貴様は既に我が眷属というか我なのだ。そう憤る事はあるまい。徐々にだが、精神支配も浸透していつてはるはずだしな」

「なっ！？」

至極当然とばかりにとんでもない事を言いのける。

「何を慌てる？ 我を内包して制御できるとでも思っていたのか？

ククッ、面白い人間だ」

弟子Aは高速で焦りまくる。

「（やばいやばいやばい。そりや当然だ。魔王と呼ばれるような代物を身体に宿して今こうして話してるほうがおかしい）」

思考が高速で巡る。

解決案を幾つか想定し、優先度の設定、その順にすぐさま実行に移す。

「我が戒めを解き放て！」

解除の呪文を紡ぎ、それを放つ。

呪われた品を装備した時、何かに呪われた時や封印された時など、割と万能に効果がある魔術である。ただし下級魔術なので、効果は以下の通り。

弟子Aは、精神力を使い果たしたはずだったが、睡眠という名の気絶を挟んだ事によって、幾分か回復しているようではあった。

だが、解除の呪文は霧散する。

「ほう？ むず痒かったが解除の呪文か。面白いものだが、無駄だ。」

そのようなものが通用すると思っているか？」

「ぐっ……」

蚊にでも刺されたかのように、何でもないと言っただけ。

弟子Aは、もう一つの案を実行する。

「風よ刃となりて切断せよ！」

右手で持った杖に風が纏わりつき左手目掛けて躊躇なく振り下ろすも、左手の手前で手が動かなくなり、風も霧散する。

「言っただろう。精神支配は徐々に浸透している。とな。そして、もうひとつ言えば、貴様の下級呪文では我には通用せん。まあ……聖なる光【ホーリー】はこの世界での限界値を超えるという規格外というのもあるが、いきなりすぎて我もほとんど防ぎようがなかったがな」

弟子Aをあざ笑いながらそう告げた。

「とはいえだ。あんな魔術を喰らった身体の状態では一人で城に戻れぬ。貴様を足として使わせてもらおう」

少し間があり……

そして――

とんでもない事を魔王は口にした。

「それに、我が居城に戻らねばこの世界は滅びるしな」

おはようと当たり前の挨拶、知ってて当然のように言い放った。

唐突に、ただそう魔王は告げた。

弟子Aは、ぽかーんだ。

空いた口は塞がらなかった。いや、もう何だろう。オカシイデシヨ？

「ななななっ、滅びる!? どういう意味だよ!」

「意味も何もそのままだ。我が居城に戻らねば、世界は滅びるといわけた」

「お前が滅ぼすんじゃないの!？」

「なぜ我が、わざわざ、世界を滅ぼさねばならぬ。別にこの世界が、嫌いなわけでもないしな」

「いやいやいや、魔王でしょ? ねえ、魔王でしょ? 魔王っていったらそりゃもう、恐怖の対象じゃないですか。というか、預言書で二週間後に魔王が復活して滅びるって書いてたし!!」

魔王はかつて世界を恐怖のどん底に落とし、勇者に討伐され滅せなかったものの封印されたのだ。

これぐらいは、確かに忘れ気味だったが、誰でも一度ぐらいは聞いたことあるはずだ。

だが、意味が分からない。

預言書には確実にそう書いてたし、あ、日記帳か……。いやそれはいい。この際そこは無視しよう。

「ほう、預言書にか? 我が世界を滅ぼすと。ふむ、ならばやぶさかではないぞ? たまには私の恐ろしさを教えるのもよからう」

若干乗り気になってる魔王に恐怖を覚える。

「やややや、いやいや。乗るなよ! 乗らないで下さい。御願います」

思わず土下座する。左手は地面につけてる為、魔王の顔が必然と地面にこすり付けられる形となる。

「痛! 痛い痛い! ちょ、まちで! まちでがおがつ、目に砂:

…痛い! ねえ、聞いて…: 痛痛痛って! 擦れてるの! ねえ! 顔が! ダメ、力をそれ以上込めるな! 痛!!! 込めないで

下さい!! やめて、土下座やめてー!」

「(そうだ。確か預言書には、魔王が復活するとは記述されていたが、魔王が滅ぼすとは書いていなかった。ただ、闇が覆って滅びるとか何とか……)」

弟子Aは土下座の姿勢を維持したまま、重要な事を思い出していた。

その事を思い出したせいか、両手の拳に更に力が籠る。

しかし、地味に預言書の内容を把握しきれてなかったのは大問題だが、それには触れないでおこう。

「ぐげええ！ 顔が、首がああああ！ 首！ 痛い痛い！ ダメ、これダメ絶対ダメ無理！ いかん、ん、ん、ん！ 角度がヤバイヤバイんだって、我とて首は90度程度が限界だったっ！ 痛い！ ねじれるううう！ 首がねじれるううう！ ……ほら、今ぶちっって何か切れたって！ 血管だって！ いがんでずよおお！！！」
あまりにも、顔を地面にぐりぐりとされ続けていた魔王の声が木霊する。

その声に、ハッとして弟子Aはすぐさま姿勢を元に戻し、ぽろりと涙を流している左手の魔王を見る。

その様子は不気味ではあったが、首が横に向いたまま正面を向けない魔王についた土を払ってあげる優しい弟子A。

「ぐうううう…滅ぼすぞ、人類を本気で滅ぼすぞ！」

ずびび、と鼻をすすりながら半眼で弟子Aを睨む魔王の目はうるうるとしている。

これが女の子なら弟子Aとしても慌てるのだろうか、どうしようもなくその絵がシュールすぎて冷静さを取り戻していく。

「や、まちでそういうのいいですから。さっきのは悪かったと思いますが、きもいですって」

そう冷たく言い返すと、魔王は再び涙を流したという。



それから魔王が泣き止まずために1時間ほどかかってしまった。

魔王は、肉体的にも、とてもとても強いが、さすがに身体の構造的に首が360度まわる様には出来ていないし、特に精神的な攻め（魔術ではなく主に言葉）には、とてもとても弱いガラスのハートの持ち主であった。

「で、どうして魔王が戻らないと世界が滅びるというのですか？」
刺激しないよう敬語で話とする。また泣かれると厄介だからだ。せっかく泣き止んだ魔王に、またいぢけられても困ると思ったからだ。

その魔王に、気になっていた事に対して質問を投げかける。
3つの目全てが赤くなっていたが、それが不気味で直視できない。
「どうやら、我が眠っている間に人間どもに、我と勇者どもの話が曲解して伝わっているらしいな」

さきほどの仕切りなおしか、なかった事にしないのか威厳たつぷりにそう言い放つ。

「曲解？」

その様子に若干呆れ顔をしてしまったが、その事については言及はしなかった。

しかしながら、魔王の言った内容には少し心動かされた。

過去の歴史を紐解くという、いや、魔王とはいえその歴史の立会人、当事者だ。弟子Aは、あらゆる学問にほどほどに精通しており、歴史関連に関しては、特に興味を惹かれるものだった。

「そうだ。我と勇者どもは確かに刃を交えた。しかしだ。神の力とやらを借りた勇者の一人が、我が居城から出れぬように封印を施したのだ。まあ、出るつもりはなかったのだがな」

「いや、その魔王が、今こうしてここに居るじゃないですか。それは一步譲っていいけど封印を施されたんじゃないですか？」

「ああ、封印はつい先日解けたな。なぜ解けたかは知らぬが、長い年月外の世界に出てなかったのだ。たまの散歩も出来なくてイライラが募っていたからな。せっかくなら少し外に出ようと思ったのだ。

で、迷ったあげく、いきなり禁呪をぶっぱという王道どころか魔王たる我にも勝るとも劣らないほどの外道の人間に遭遇する羽目になったがな」

ふんと、鼻息を荒げ忌々しげに言い放つ。おそらくさっきの土下座の事については言及していないが確実に勘定に入っているのだろう。

「封印が勝手に解けた……」

それを無視し一つの事案が浮かび、弟子Aはこの時、電流が走る。まさに、電球が光ってピコーンときた。

この前師匠が、亡くなったから封印が解けたのではないかと。

そのことに関してはともかく、今は滅びる原因究明が先という事を思い出す。

「あー、それでなぜ城から離れると世界が滅びるというんですか？」

「うむ、我が居城はこの世界の悪しきモノ……人間で言う所の瘴気が全て集まり、噴出する場所にあるのだ。そしてそれはいずれ世界を飲み込む。だが、我はそれを吸収し無限に力へ還元する体質なのだよ、人間よ」

衝撃の事実。第四話にして告白する事なのだろうか、そんな謎の疑問も浮かぶものの言葉が出ない。

「だがな、我が居城に押しかけてきた、勇者やらその従者やら名乗る一団が、百人規模で攻め込んできた時に、今言った台詞をまんま伝えたのだ。だが、戯言をとぬかし、あまつさえ奴らは我を倒さねば世界は平和にならぬ。とだけ告げ話し合いにもならなかったな。まあ、我とてむざむざ死んでやるつもりもなかったもので、全力で相手をしてやれば数人だけ生き残り、そいつらは一戦交えて、初めて瘴気を吸収している様を見て、我が言を真実と知ったはずだった。そして、おめおめ逃げていきおったわ」

魔王がここのため息をつきながら言葉を紡いだ。

「だが、我も破れぬ結界を張って逃げていくとは、予想外ではあったがな」

懐かしいと言わんばかりに、とんでもない話を披露してくる。

ちなみに瘴気とは、人間に関わらず、生命ある存在には猛毒である。一息ならともかくだが、体内に吸引し続けられれば、確実に死に絶えるような危険極まりないものだ。

「そして今も尚、瘴気は溢れ続けている。まあ、2週間程度の外泊なら我が存在せんでもなんとかなろう。だが、それ以上空ければこの世界が滅びに傾くのは容易いだろうな。理解できたか人間？」

この魔王という存在は、今更ながらとんでもない規格外だ。

瘴気を吸収する。そして瘴気を力に変える……。こちらはどれぐらの還元率を秘めてるか知らないが、少なくとも、人間がかなうわけもない。つまり人間が対峙するには最悪の環境ではあるが、魔王にとって最高の環境であるという事だ。人間にとっての毒が魔王には無限に存在する回復薬みたいなものだから。これでは、滅ぼす事が出来ず封印と形を取るのは納得出来る。

魔王の言を信じるなら、イタチの最後っ屁で、居城から移動出来ないようにしただけだが。

だが、それは些細な事実だ。

最も重要なのは、魔王と呼ばれる存在が実は、人類の勇者と言っても過言ではない存在であるということだった。

瘴気が溢れないために、わざわざそこを根城とし存在するというのならまさに英雄だ。

感謝こそされど怨むなどともないのだから。

だからこそ弟子Aは、ここで疑問に思った。

なぜ魔王と呼ばれ、襲われたのか。なぜ討伐される事となったのか。

討伐をしないで放置しておくのが最善の一手にも思われるからだ。

そしてその好奇心は抑えられず、聞いてしまった。

「ククッ、知りたいか？ 我がなぜ魔王と呼ばれるようになった始

まりを。魔王として君臨するかを。いいだろう。教えてやろう。…
…全ての始まりは、あの一つの閃光であった」
仰々しく――魔王がそう告げる。

全ての始まりを――

全ての、諸悪の根源たるとされてきた魔王の伝説を、魔王の口から紡がれる。

顔が未だに横に、向きっぱなしに関しては、蛇足なので突っ込まないでおこう。

「閃光？」

ぱっと思いつくのは聖なる光【ホーリー】だ。だが、それではないのだろうと思いつきの言葉を待つ。

「ああ、ある日我がくしゃみをした時に、うっかり全力で魔術を撃ってしまってたな。くしゃみと 同時に口から放たれた閃光が、あるう事か居城に穴はあくという事態になったのだ。あの時は修理に時間が掛かったものだ。そして人里の一国が、運悪く射線上にあったらしく滅んでしまってたな。まったく、困ったものだ」

空いた口がふさがらなかった。こいつはとんでもない。バカだ。いや、大バカだ。

だから、全力全開で叫ぶ事にした。

「困った奴は、おまえだろうがあああああああ！！！」

耳元で言われた魔王は、白目を向き気絶し、弟子Aもあまりの大声を張り上げすぎてその場にへたり込む事となる。未だ城壁は目に

見える範囲。距離的に進み具合は最悪だ。進捗具合は一步前進もなく、ただ二歩後退した感じ。もう何も考えがまとまらない弟子Aは空を仰ぐ事にした。

余談だがその日、何度目かの弟子Aの叫びは全世界を震わすほどの振動が起き、遠くから聞こえた何かの音と振動は不吉な事が起きる前触れでは、などと噂される事になるが、あながちハズレではなかったと知るのは、魔王と弟子Aとそれに巻き込まれる人々だけであつた。

此度125年8月17日

午後2時を過ぎた頃であつた。

世界が闇に覆われるまでのタイムリミット…二週間だね

第4話：弟子Aと魔王と真実（後書き）

ここまで見ていただきありがとうございます。

だいぶ重要な情報を提示した形になったかと思います。

しかしながら、弟子Aはじえーんじえん、進む気配はないので、そろそろ動かしたいと思いますのでご期待くださいませ。

第5話：弟子Aついに動く！

この物語は！

魔王を討伐するためにある国が勇者を選定し、その勇者に世界の命運を託し切磋琢磨し苦難に満ちながらも仲間達と協力し魔王を退治するまでの話になる予定でしたが、もしかしたら……。

弟子Aは、今後どうするかの方針に悩んでいた。
まず

1. 魔王の居城を探し出す。
2. 魔王の居城に魔王を案内する。
3. 魔王は倒しちゃだめ。
4. 魔王の精神支配から逃れるための方法を考える。
5. 左手の存在を上手く隠す。
6. 体調、魔力を出来るだけ万全に戻す。
7. 正直勇者は探さなくていいんじゃない？
8. 弟子Aの喉がガラガラなので水分補給
9. とりあえず城壁が見えないぐらいまでの位置まで進みたい

という感じだ。

弟子Aは、知恵を振り絞って考えていた。

「（1、2に関しては、自分と同化してるため情報収集をして、場所を突き止めて、移動をすれば何とかなるだろうと見切りを付ける）」

しかしながら、3、4はかなり厄介だ。

「（3に関してまだ聞いてはいなかったが、弟子Aが死んでしまった場合に、魔王は、一蓮托生で消滅するかどうかについて、魔王が

意識を取り戻したら聞くとしよう。魔王を倒せば瘴気が溢れ続けるから無理。まあ、倒せる術が自分にはないけど……。特に4は、これが実は最も切羽詰った事態だ。どうにかせねばあらゆる行動が出来ずに世界どこかまづ自分が消滅してしまう」

5に関しては、既に左手の魔王に、布の服の一部破いて、包んでおいた。

「(6は魔王のせいで、魔力が吸い取られてるらしいから完全回復は無理だろう。故にモンスターに襲われないよう、極力避けよう。節約節約)」

7は……。

「(勇者を見つけたら、まず、間違いなく魔王を倒そうとするだろう。魔王の眷属という形になってしまっているボクからの言葉や、魔王の言葉を、すんなりと受け入れるというのも、なかなか難しいはず……)」

弟子A自身、正直に言って絶対的な自信はない。だが、わざわざお家に帰りたいがためについた嘘にしては、大げさすぎる。何より、日記帳……もとい預言書の内容とも、あながちはずれではないどころか、近いだろう。

「(よって、勇者探しはしない方針で行こう)」

タイトルを魔王早く帰ってきて……!!に変えた方がいいんじゃない? そんな風に思う、弟子Aではあった。

「(8、9に関しては、願望。そろそろ本格的な旅をしたい! 後喉かわいたしね)」

やっとの思いで、弟子Aは歩き出した。

まずは、最初に行こうと思っていた村に歩を進める事にする。

ウトキテ国がある、東の大陸から、西の大陸に渡るための航路を一手に引き受けてる港町がある。

そして、その港町とウトキテ国の首都までの間のちょうど中間地点に存在する村だ。

旅人や行商人の行き交いも多く、新鮮な情報もそれなりにあるだろうと踏んでのことだ。

千里の道も一歩から、もうさすがにこれ以上の不幸は来ないだろう。

来たとしてもマシなものはず。最悪の一歩なら、後は気分上々、うなぎのぼりの筈……と弟子Aは僅かな希望を抱くのであった。

弟子Aの装備変更

武器…木の杖

防具…布の服↓破れた布の服

左手…布で包まれた魔王

村までの旅路は、ついさっきまで起こっていたイベントとは対照的に平和そのものであった。

しかしながら、本来はこれが当たり前なのである。

首都周辺は軍事演習も含め騎士団が出立し、モンスターの制圧を数ヶ月に1度大規模に行っているため、大抵は、旅慣れた冒険者や少なくとも弟子Aにしたら、取るに足らないモンスターしかないのだ。

この事からも、魔王に出くわす不運というのは、飛びぬけているだろう。

「（ああ、平和ってすばらしいなあ）」

縁側でお茶を啜りながら、一日のんびりと過ごしてるかのように、心の中で呟く。

しかし、実際は左手が魔王になり、精神支配の影響があるんじゃないかと、心配にもなって来る一言ではあったが、何もなさ過ぎて、弟子Aは思わずそう思ってしまったのだ。

そんなこんなで、ありえない事に、まったくアクシデントもなく、たまに出るモンスターは、ぷるぷると震えるだけのスライムぐらいだったので、とりあえず杖で突くと、どこかへ逃げて行き、何だか

微笑ましくなってしまうぐらいだった。



何時間もの間、ただただ長い距離を歩き続ける。

日が落ち、月が夜を照らす時間帯になった頃に、ようやく村へとたどり着く。

「ふう……歩き疲れたけど、なんとか着いた着いた」

村の門を潜り、伸びをし終えると、宿屋を探す事にする。

夜中ではないにしろ、既に夜だ。村人達は、ほとんどが家に戻り、仕事を終えている頃合だろう。

本格的な情報収集は明日にして、とりあえずの所は宿屋に行く事にする。

少し歩くと、この村の住人だろうか。青年と呼べる頃合の顔をした人物の姿が目に入る。

特に何もしないで、ただ立っている様子が気になり、弟子Aは声をかけてみる事にする。

「ようこそ、センタ村へ！」

寄っていくと、こちらが目に入ったのか、弟子Aに歓迎の意を示し、自身の村の名前を、親切にも教えてくれる青年であった。

「これはご丁寧にどうも。宿屋の場所って知ってます？」

何年か前に師匠と、そして多くの兄弟弟子と共に連れられ来た事はあるものの、村自体を回ったことはない。

こういう事は、その村に住んでる人に聞くのがてっとりばやい。

「ようこそ、センタ村へ！」

「あ、いや。センタ村は分かりました」

どうやら、こっちが聞いていないと思われたのかもしれないと考えた。

思考中は、他の事に意識が回らない事があると師匠に注意された事もあった。

ぼーっとしているように見えてしまったと思い、失礼な態度を取ってしまったことを詫びて、改めて質問する事にする。

「つと、すみません。宿屋の場所は知っていますか？」

少しの沈黙の後……。

「ようこそ、センタ村へ！」

そう青年は告げてくる。

困惑しながらも、もしかしたら怒らせてしまったのかもしれない。と考えた。

出来るだけフレンドリーに、かつ相手を怒らせないように、台詞を慎重に選びながら、再度質問する事にする。

「あーいや、すまない「ようこそ、センタ村へ！」……です」
遮るようにして言われた声にも怯まず、弟子Aは続ける。

「それでセンタ村の宿「ようこそ、センタ村へ！」……屋はどこでしょう？　なんせ「ようこそ、センタ村へ！」久々に来たの「ようこそ、センタ村へ！」で、ちょ「ようこそ、センタ村へ！」つと「ようこそ、センタ村へ！」宿屋「ようこそ、センタ村へ！」の「ようこそ」うるさああい！！！」

青年の言葉を最後に遮り、思わず叫んでしまう。

一言で言えば、しつこい。

それが弟子Aの感想だ。

大声を張り上げたせいか、乾燥しきっている喉は限界にきている。出来ればこんな所で無駄な話はせずささと宿屋で休みたいのだ。

相手の青年も、苦虫を潰したような表情をしている。

そして、沈黙が二人を包み込む。

時折鈴虫が鳴いているようで、心地いい風も相まって夜の静けさ

が身体を撫でる。

そして意を決したのか、目の前の青年が再び口を開ける。

「ようこそ、センタ村へ？」

「聞くなああ！」

それが魔術のキーとなってしまうた。

「（なるのって、しまっ……！）」

ツツコミむ間も短く、そう思った時にはもう遅く、炎の弾が出現しそして――

「貴様はうるさくてまったく眠れんぞ！」

いつの間にか気付いたのか、左手が弟子Aの顔面を捉えるべく動く。が、運良く（魔王的には運悪く）左手の魔王が炎の弾に命中する。

これで、青年が焼死体になり、新たな罪状追加というシナリオは回避された。

だが……。

「うおっ、何事かー！」

左手に包んでる布が焼け落ちているだけで、魔王自身にダメージはない。

状況が分からず目の前が真っ暗であったと思ったら、急に視界が燃え出したために魔王が叫ぶ。

「ようこそ、センタ村へ！？」

目の前の青年は、何事が起こったのかと叫ぶようにしていた。

何せ、いきなり現れた旅人らしき人物から炎の弾が生まれたかと思うと、自分自身の左手にぶつけ、燃え落ちた布から出てきたその手には、筋肉ムキムキの何かもう訳の分からないモノがくっついており、そしてそこから、叫び声がするのだ。

青年は炎の弾を避けようとしていたものの、起こった出来事が多すぎ、さすがに驚いてしまったのか、距離を取ろうとした時には自身の足が絡み、その場へと倒れこんでしまう。

そしてその事態は、弟子Aにとって最悪なシナリオへと運ばれて

いる事は間違いなかった。
いきなり魔王となった左手を見られるという、最悪なシナリオは、
最悪な展開を生む事しか出来ないのだろうか――



弟子Aが出立して間もなくの頃。ウトキテ国の魔導師を夜通し総動員し、大臣は弟子Aの出立の報告、弟子Aの人相書きと預言書の内容を各国へ、協力をしてくれるようお触れとして西の大陸まで魔術を使い届けられているのだった。

王が倒れ、大臣の手腕が遺憾なく発揮されすぎたのが、弟子Aの知る由ではない所で、首を絞めることとなるかもしれない。

此度125年8月17日

午後9時を過ぎた頃であった。

世界が闇に覆われるまでのタイムリミット…二週間じゃね？

第5話：弟子Aついに動く！（後書き）

弟子A現在の装備

武器：木の杖

防具：破れた布の服

左手：布で包まれた魔王↓全裸の魔王

所持金：2240G

第6話：弟子Aとセンタ村での出来事

この物語は！

魔王を討伐するためにある国が勇者を選定し、その勇者に世界の命運を託し切磋琢磨し苦難に満ちながらも仲間達と協力し魔王を退治する勇者を探す事を辞め、魔王を居城まで運ぶ話だ！

何か、上のあらすじが変わってないか！

「いやいやいや、今はそんな事を考えている場合じゃない……」

状況は最悪だ。まず、左手は絶対にばれてはいけないという大前提が、初手でひっくり返ろうとしているのだ。まださっきの青年は、腰を抜かしたまま、状況把握出来ていないのか、視線をキョロキョロとさせている。

弟子Aは、とっさに左手を自分の後ろへ隠すと、右手で魔王の顔を手で押さえつける。

「……っ！ ……っ！！」

何かを言わんとしているのか、フゴフゴと言いながら今にも暴れ出さんとする魔王の様子が伺えた。しかしながら、自由にするわけにはいかない。そんな事をすれば、何をするか分かったものではなかった。

「あー、いや。ごめんなさい。何かの手違いで魔術が発動してしちゃって、はは……」

弟子Aからは、乾いた笑いしか出ない。

苦しい言い訳ではあるものの、本当にその通りなのだから仕方ない。

「……」

未だ腰が抜けているのか、その場で座り込んで何やら考えている

様子だった。

動けないでいる青年に手を貸したいものだが、それも実行は出来ない。なんせ、両手は今、魔王を抑えるのに精一杯のためだ。

怯えたような、怪訝そうな目を弟子Aへと向けられる。

その間にも弟子Aはこの状況を打破し、切り抜ける言い訳を考えていた。

強く手で抑えられ、声も出せない状況のため、ジタバタと暴れる魔王の小さな手が、弟子Aの、背中辺りをポコポコと、音が出そうな感じで、何度も叩き付けている。

愛らしい人形なら、微笑ましい様子なのだろうが、いかんせん魔王なので、決して！いい雰囲気には見えない。気持ち悪いだけだ。

「っ……これは、えーっとその、ね？　ほら、なんていうか、あー……そうだ。人形！　人形なんだ！」

背中に、気持ち悪い雰囲気と、痛みを感じながらも、そう言い続ける。

左手が、全身紫色をしており、ムキムキ筋肉で、まさに鎧！とも言える様な、肉体を持ったバケモノを、あえて人形と言つてのける弟子Aは、それほどまでに焦っていたのだ。

魔王に取り憑かれるなんて、口が裂けても言えなかった事とはいえ、そんなしゃべる人形を、持ち歩いている趣味の悪い弟子A、と思われるのも、だいたい周りから見たら、十分に気持ち悪いだろう。

「……」

「……」

再び、お互い沈黙する。

さっきはこれがきっかけで、炎の弾を撃ち込んでしまったので、注意する。

「（しまったあー。完全に言い訳をミスった感じが出てる……まず

いますい。どうするべきか)」

弟子Aが頭脳を駆使し、更に高度な言い訳を考え始めた。その間にも、なにやら左手の魔王の様子がおかしかった。

否、さきほどまで、暴れ続けていたのに途端に痛みが消えたのである。

さすがに暴れ続けて疲れたのだろうと判断し、むしろ大人しくなったのは、これ幸いと更に、思考を巡らせていく。

青年もその沈黙の間に、何とか土を払いながら、起き上がり大きくため息をついていた。

「……」

未だその目は、不安も入り混じってこちらを見ている。

「よう……こそ……セン……タ……村へ……」

そして、最初とは打って変わった様子ではあるが、一貫してその言葉を言い放つ。

逆にここまで来たら、すごいんじゃないのか？と考えてしまう。

そこで、弟子Aは気がついた。

「（もしかして、この人はこの言葉しか言えないんじゃない？ それなら、現在の手を見られても問題ないじゃないか。なんせ、この事実がこの人から漏れる心配もない！）」

ぱっと閃いた事は、弟子Aにとって最高の事実であった。

しかし、その時、抑えていた右手から左手がすり落ち、ガクンと力が抜けたのだった。

全然力が入らなくなった左手の魔王を見て、弟子Aは愕然とした。青年もなんか愕然とした。

魔王は、紫色から真っ白になっていたのだ。

まさに、燃え尽きたかのようなであった。

主に、魔王の命の火が……だった。

少なくとも、口から何か、魔王と似た姿を模った白い煙のような

ものが出掛かっていた。

「ま……魔王ううううう？！……！」

「ようこそ！？ センタ村に！？」

弟子Aは、焦った。そりやもう焦った。

世界を救うには魔王が必要だと言うのに、これはない。

まさか、顔を強く抑えただけで、こんな事になるとは、誰が予想しただろうか。

否、誰も居ない。だって、預言書にも書いてなかったもん。

弟子Aは知らぬ存ぜぬを貫こうとしていた。

青年も、焦った。そりやもう焦った。

人形だと言い放ったそれが、魔王と叫ぶその事実には、恐れおののいた。

目の前の人物が、誰かは分からないが、気が触れたとは思えなかった。

逃げたい気持ちも沸々と浮かんできたが、それでも青年は動かない。

「あわわわ、どうすれば、ボクどうすればいいんだ！？」

こんな状況になり、さすがの弟子Aもすぐに行動出来なかった。

しかし、思いもよらぬ人物から助け舟が出る。

「ようこそ！ センタ村へ！」

目の前に居た青年が、弟子Aの両肩に強く手で掴み大声でそれを告げる。

その言葉は、最初から同じだった。しかし、まるで、何をしてるんだ！そんなに慌ててちゃ何も出来ないだろう！と、伝えるかのよう。

それで目が覚めたのか、すぐに弟子Aが回復の魔術を試す。

その様子を目にして、青年は弟子Aから離れる。

だんだんと、魔王と似た姿をした白い煙のようなものが魔王の体内へと戻って行く。

すると、魔王の身体の色が紫色へと戻っていく。

「すごく……気持ち悪い光景です……」

そう呟いた弟子Aに対し、青年も頷く。

アゴがはずれそうな感じに大口を開けて、無理やり白い煙が戻ろうとしている。

実に不気味で、何かやばいモノでも召喚する儀式なのかと、言いたくなる。

そして、見事に紫色に戻った魔王であった。

しかしながら、ここで疑問が残る。

なぜ、青年はあんな風に、弟子Aを助けてくれたのか。

魔王を心配するかのようにつぶやき、回復まで施した弟子Aから逃げるならまだしも、動かないで居てくれたのだ。

「（もしかして、物凄くいい人なのかもしれない。それと同じくらい変な人だけだ）」

と、左手が魔王の弟子Aに思われるというのも、なかなかすごい事ではあった。

「ようこそ。センタ村へ」

さっきまでの目が嘘かのように、暖かい目でこちらを見てくる。

何かを、一緒にやり遂げたような感情……そう、友情が芽生えた気がするぐらいであった。

「ありがとう。さっきは助かったよ」

こちらも笑顔でそう告げる。

何だか、この人は、誰にも、この事を告げないだろう。

確信はないものの、そんな気がする。

弟子Aの予想は結構当たる事も多く、さすがは偉大なる預言者に

して天才魔導師の弟子Aだ！と言わしめるほどであった。
青年は頷くだけであつたものの、こちらを見守ってくれていた。

「ぐう……ぐううう……だめ。ほんとだめだって、魔王だよ、
我は魔王だよ？　お願い！　空気を！　吸わ……息があ！　息が出
来ない！　酸素おお、酸素をくれ！　くださ……い。くだ……さ
い。かみいいい、かみさまあ、おねがい……うううう」

何やら、魔王がうなされてるか、発狂じみた感じで叫びだす。

それにしても、魔王が神様に助けを求めるのはどうなのだろうか。
「なっ、バカ静かにしろ！」

「ぬ、人間きさっ……っ」

右手で抑えたものの、既に声はぼつちり聞かれたはずだ。

しかも、自身で魔王と叫び、この人形と言い張つたものも魔王と
言つちやつたので、これは決定的である。

だが、それでも青年は動かない。

暖かい目、そしてこちらの気持ちを察してくれたのか、言葉は発
さずただじつと見つめてくれているだけだ。

「ようこそ、センタ村へ！」

その声と共に、村の奥を手で指していた。

そちらからは、さすがにこっちで何かが起こっていると感じてか、
村人達が何人か近づいてきている。このままここに留まれば、この
左手を隠すものもなく、そして言い訳すらまともなのがないため、
怪しさ満載だろう。

「（見逃してくれるのか……？）」

弟子Aは、感謝した。全ての発端が弟子Aの責だというのにも関
わらず、この青年は、何も聞かずただただ、こちらを助けてしてくれ
ているのだ。

「ありがとう！」

そして、踵を返し村から脱出する。

宿屋で休めないのは痛い、今回ばかりは仕方がない。

この左手が見つかり、騒ぎになる事態が防げただけでも、行幸と言えるだろう。



「名も知らぬ君に……ご加護があるように」
青年は、弟子Aの背中を見送る。
この言葉は、自分以外に誰の耳にも届かなかった。
しかし、青年は弟子Aには、届いたんじゃないかとも思っていた。



「っ……はあはあ……ニンゲン！」
「はあはあするな、気持ち悪い！」
魔王が走ってるわけではないが、魔王は勢いよく前後に振り回され続けているのだ。すごく疲れても致し方ないのである。
村から離れるのにどれくらいの時間が経っただろう、弟子Aの身体は悲鳴を上げていた。

体育会系か文科系かと聞かれれば後者だ。そんな弟子Aが耐久マラソンかのように、走り続ければどうなるか分かるだろう。
身体は限界に来ているものの、魔王への対処は鋭く増していた。
その言葉にショックを受けたのか、泣きそうになっている左手の魔王を尻目に、弟子Aは駆け出していた。

村がもう見えない位置まで来ると、街道をはずれ森の奥へと進む。
「ここまで、来れば大丈夫だろう……」

木々に囲まれたここならば、周りの目もない。
少し安心したのも束の間、木の枝を集めると、魔術で火を起こし、
焚き火を作る。

「これで、獣やモンスターも近づいてこないだろう……」

その気配もなかったが、念には念を心掛ける。

もうだめだと、身体が自然に倒れこむようにして、横になる。

ぐうというお腹の音が空しく響く。

「ああ、そういえば何も食べてなかった……」

今頃気がついたかのように、呟く。

ゴールドがたくさんあっても、使わねば意味がないし、これを食べても腹は膨れないのだ。

「……きさまあ！さっきから我をぞんざいに扱いよって！お前は我のけんぞ「黙れ、煩い、しゃべるな、ボクは今ものすごく、不機嫌だ」……」

静かに、そう告げる。

しかし、さすがの左手の魔王も、黙っていられなかった。

息を止められ殺されかかれ、かなり振り回されかなり気持ちも悪い。

今迄で一番きつい事を言われたが、それでも魔王は、一言言わねば気がすまなかったのだ。

「なっ、わ……我だってなあ！息を止められ死ぬかと思ったんだ！魔王が窒息死なんてありえんわ！」

「三度は言わない。しゃべるな」

「……はい」

どっちが魔王なのか分からないやりとりだった。

魔王は、余りの恐怖にプルプルと震え上がっていたが、この様子は幸い誰にも、見られることはなかった。

なぜ弟子Aが、ここまで強気になれるかも分からないが、今は、ただただ眠りたかった。

目を閉じ、濃い内容の出来事が思い出される。

そんな内容の数々でも、弟子Aの睡魔を止める事は出来なかった。
「……食料の調達も……他にも色々しなきゃ……な」
数分して弟子Aは、深い闇へと意識を落としていった。

「……ぐすん」

そして、左手の魔王もまた泣きながらも休む事にした。

「（絶対に、我との立ち位置とか、教え込まねば……うう、精神支配は効いてないんじゃないか……怖すぎる）」

魔王もまた、体力と魔力を、元に戻す事に専念する。

明日もまた魔王は、戦わねばならなかった。それを考えれば、今まで数々の勇者と戦って来たが

、そんなのは、弟子Aに比べれば他愛もない、出来事に思っていた。魔王たる人物に対し、ここまで高圧的になったものは一度も、誰一人としていなかったのだ。

自身の命を何度も脅かした人間は、弟子Aが初めてでもあった。

「我は……我は……魔王……ガ………なるぞお……すう………すう………」

涙を流しながら魔王もまた、意識を闇へと落としていく。

そうして、今日もまた、深い深い夜と静寂が世界を包み込んでいった。

此度125年8月18日

午前0時を過ぎた頃であった。

世界が闇に覆われるまでのタイムリミット…十三日ほど

第6話：弟子Aとセンタ村での出来事（後書き）

弟子A現在の装備

武器…木の杖

防具…破れた布の服

左手…全裸の魔王

所持金…2240G

ここまで読んで頂き、ありがとうございました。

今後とも、弟子Aと魔王の冒険活劇……あれ、おかしいですね。

早く勇者来て！とまだ見ぬ勇者に期待を込めながら書きを書いていききたいと思います。

追記…作品全体の構成を統一しました。

第7話：弟子Aと空腹

この物語は！

魔王を討伐するためにある国が勇者を選定し、その勇者に世界の命運を託し切磋琢磨し苦難に満ちながらも仲間達と協力し魔王を退治する勇者を探す事を辞め、魔王を居城まで運ぶ話だ！

朝になると、焚き火の火は消えていた。

太陽がまぶたの上からも分かるぐらいに眩しく輝いている。

夜中は不気味だった森の中が嘘のように、新鮮な空気が充満し、周りも明るくなっていた。

「……うう……ねむい」

若干意識は朦朧としている。

眠気が残るため、二度寝をしたくなるも何とか思いとどまる。

横になっていた身体を起こすため、地面に手を付き立ち上がる。

「ぐええ！」

立ち上がる時に、変な声が聴こえたが、慣れたことにスルーをして無言で身体についた草などを払っていた。

「おいしい、待て待て、待ってくれ。我は、魔王ぞ？魔王だぞ？」

「……ねむい。お腹すいた」

「我の方は、いきなり顔に重負荷がかかって、目はすっきりだ」

「よかったね」

「ああ……そうだな。って違う！なぜだ。なぜ我がこのような扱いをされねばならぬ！」

「ふああああ……にえむい」

未だぼーっとしてる頭は上手く動かない。

どうやら太陽の位置からしても、まだまだ朝になって時間が経ってないようだ。

目をゴシゴシと魔王でこする。

それぐらいには分かる程度には、目が覚めてくる。

「ちよい！ まっ！ 貴様はあああ！ 我は、貴様を起こす目覚まし時計ではないぞ！ ああもう！！ お前という奴は！ くっ……名は！ 名はなんと申す！！」

朝からイライラが募り、積極的攻勢に出る魔王。先手必勝といわんばかりに苛烈に熱弁を振るうも、名前を怒鳴ろうとして未だ、名すら知らぬ関係だった事に気付く。

第7話にしてついに、預言者にして天才魔導師の弟子Aの名前が、よもや魔王の方から聞かれる。

弟子Aという呼称に慣れすぎているというか、誰も名前については気にしなかっただろうが、名前ぐらいは誰にでもあるし、もちろんその中には弟子Aも含まれている。

「（怪しい……今頃になってなぜ？）」

普通の仲間なら、百歩譲ってこの場まで聞かなかったとしてたら、答えるが相手が魔王となれば話は別だ。

「……魔王、世の中には名を使った呪いがあるの知ってるでしょ？」

「ギックウウ」

魔王は内心その一言で、ドキッとした。

もちろん恋の始まりでは決してないと、あえて言っておこう。

「なななな、なんのことかなあ」

明らかに狼狽した様子を隠しきれていない。それに気付いてないのか、弟子Aは自身が知っている情報を、得意げに話す。

「魔物やモンスターの特殊な上位種はそういうのに長けた者が居る

みたい。そんな所の頂点にいる魔王に名前なんか知られた日には、
とんでもない事になるので……ボクの名前は秘密です」

人差し指を立てながら自身の口の前に動かし、丁寧にお断りする。
「やーだーなあー。人間！ 否、同胞よ。我と汝、既に一心同体、
ならば仲間みたいなものじゃないか。名前を知らないのは寂しいで
あろう？」

もっともらしく、何とか取り繕うとするも、魔王の劣勢は否めな
かった。

「じゃあ、呪いには魔王の名前にすればいいんじゃないかな？ 一心
同体なら、それでボクにも呪いの効果あるでしょ、実際に一心同体
だしね」

「おお、なかなか頭がいいな。さすがは禁呪の使い手だ」

「やっぱり呪い掛けるつもりだったか」

「……あゝ」

一晩じつくりと、夢の中で描いていた完璧で、華麗なる魔王の支
配の進めは、終わったのであった。

その後、魔王の断末魔が聴こえたものの、その左手の魔王は傷一
つなく健在であったが、しかし、ぼおーつとしており、何やらげっ
そりと頬がこけているようにも見えた……………。



軽く身体を動かすと痛みが走る事に気付く。まだ、筋肉痛が残っ
ておりながらも何とか全身を動かして、その森の植物や果物を調べ
手に入れ、とりあえず数は少ないものの朝食を取った。

その間も、魔王はただただ呆然と、昨日の白い煙のようなものが
出かけていたが、弟子Aは気にしないで行く事とする。

街道へと戻ると村方面ではなく、港町へと向かう。

一応騒ぎにはならなかっただろうが、万が一あの村人が自分の情報を漏らしていた場合、大変な事になるからだ。そんな危惧は、な
いと思っ
ていても、なかなか村へは行けなかった。

港町へと向かう最中、一つ聞いていなかった事を思い出した。

「そういえばボクが死んだ場合って、魔王はどうなるの？」

「……」

「おーい、魔王？　魔王さーん？」

重い足で歩きながら気長に返事を待つも、答えが返ってこない。

「むう、もしかして……分からない？」

気付いてるのか気付いてないのか、虚ろとしていた左手の魔王の目に光が宿る。

「知りたいなら、お前の名前を教えるべきだな」

「こだわるなあ。別にボクの名前なんて気になんなくても魔王なら、ボクみたいな小物。気にする必要ないでしょう？」

「む……」

それもそうだな、と魔王は考えた。

それこそ、世界を恐怖に、世界とまともに戦った魔王が、たかだか人間一人に拘りすぎるのは、魔の王とはいえ、王たる者のする事ではなかったとまで考えは及んでいく。

「そうだな。それもそうだ。貴様のような人間、我に取ったら赤子以下よ！」

実際に魔王からすれば、弟子Aは赤子以下なので、それについての反論は出来なかった。

「でしょ？　で、そんな魔王様は、ボクが死んだ場合どうなるの？」

「ふむ、それに関しては簡単だ。我もまた同化している以上死ぬだろうな！」

自信たっぷりにそう告げる。

「そう」

それだけ言って、興味が失せたかのように弟子Aは、会話を止める。

「なんだか、我を軽くあしらってないか？」

弟子Aが無言の返事を返すと、半眼で弟子Aを見ていた魔王もまた、興味がそれ以上ないのか、その後の会話は続かなかった。

最悪な状態だと言う事なのが改めて分かった。

なんせ、無敵であるはずの魔王は、同化という状態では宿主……つまり弟子Aに命を握られているようなものである。

更に言えば、弱点がまるまる弟子Aなのだ。

これは本当に不幸体質と効果が相まって、そろそろ刺客とか来ちゃうんじゃないかと考えてしまう。

これが、ただ勇者が魔王を倒してハッピーエンドならば、正直嫌ではあるものの弟子A自身倒されるのも、抵抗はするが仕方ない事とも思える。だが、倒されて世界も道連れだなんて事は考えられなかった。

「(うー……世界を救うためとはいえ、きつすぎる)」

弟子Aは、まだ18歳だ。若いのだ。全裸だったという過去を忘れるほどに、今の状況は苛烈にして厳しすぎる事態になっていた。

「(全裸とか……やな、事を思い出したな……)」

ただでさえ、上がりにくいテンションが低空飛行を続ける所に、更に追い討ちをかけたように下がる。もう墜落は間逃れないんじゃないかってぐらいに下がる。



ランチの時間を過ぎても、未だ港町は見えず、朝食べた果物ぐら

いではお腹一杯とも言えず、疲れも本当に限界を超えている状態であった。

腹の虫がオーケストラでも始めたかと言わんばかりに、鳴り始める。

「貴様の腹の中には、バケモノでも飼っているのか？」

「はあ……左手になら居るけどね……」

「なっ、我を愚弄するか！ 最初にもバケモノバケモノと言っておつて！ 我は魔王！ 魔王が「ぎゅるううううぎゅるるうううう」……」

周りに人が居るなら、確実に、顔を真っ赤にしてどこかへ走り去ってしまう自分が、容易に想像出来るぐらいに、その音は凄かった。「ぐう……これは本当に、ボクはだめかもしれない……」

「うーむ、さすがにまだ宿主件眷属件同胞件我が足に死んでもらうのは困る。貴様には怨みつらみあるが助けてやらん事もないぞ？ もちろん、貸しだがな」

「助ける……て、料理でも……作るつもり？」

一瞬想像した裸エプロン。

しかし、それは魔王の裸エプロンだ！！！！

呪われたSEが聴こえてくるようだ。

ああ、無常。まさか、空腹で倒れる最後の映像がこんなものだなんて――

弟子Aは、あまりのショッキングな映像に吐血したかのように倒れた。

吐血はしてないが、実際に倒れたのである。

「ぬおっ、本当に倒れるとはな。仕方あるまいか」
そう言うど魔王は、意識がない弟子Aの身体を存分に使うことに決めた。

本人が、気絶しているためか弟子Aの身体を自由に動かせる事を確認する魔王。

「さて、行くか」

おもむろに歩き出して行くのであった。



「う……エプロンを着た変態が、襲ってくるう……」

「起きろ、人間。餌だ」

「ううっ……いいにおいが」

気付いた視線の先には、ご馳走があった。

幾つかのパンに、ステーキに、サラダ、コンスープまである。

飲み物にとワインまでご丁寧に用意してあったりもした。

お皿に盛り付けられたそれらは高級料理という雰囲気があった。

ただし、この場合は外でありテーブルもイスもなく綺麗な床ではなく、地面に置かれている状態であった。

「え……う、まさか作ったの？」

「王たるものは、家臣に収獲させ、それを献上させ頂くが王よ。座して待てばよいだけだ。これもまた同じ事よ」

「あー、よく分からないけどいただきますー」

毒を喰らわば皿まで……とは違うが、気絶から目覚めたばかり、空腹すぎるという状態はまともな思考が出来なかった。

パンに飛びつく様にして一気にかぶりつく。

「そのひよろっちい身体によくそれだけ入るな、驚きを通り越して、関心すら覚える」

「はひ？ホフは、べふに、あふあふ……ん、普通だと思うよ」

ふっくらとしたパンに噛り付き、まだまだ暖かいスープが入った食器を手に持ち、皿に口を付けると、一気に口に流し込む。そして再びパンへ、美味しそうなステーキの肉の匂いだけで食は進みそうだった。

手元にあったナイフでステーキを切り分けると肉汁がたっぷりと出て、それはそれは紙を裂くと同意なほどに柔らかかった。

一口大に切り分けたステーキをフォークで口に放り込むと、そこにはジューシーな味わい、最低限の調味料、最高の焼き加減で味付けしただろう、ソレは肉本来が持つ最高の芳醇な香り、味を引き出し口の中、身体の中を巡る。

「んんんんんんんんんん、すごい！何これ！」

正直、弟子Aは驚いている。

まさかこんな道の真ん中で、ここまで美味しい物を食べれると思っ
ては居なかったのだから。

ワインも一口飲む前に、グラスを空に掲げ色を見、香りを楽しみ、
そして口へ流し込む。

注…弟子Aは18歳だが飲酒については問題ないので、現実
に未成年の方は飲酒はダメだよ♪

「ああ、美味しい……こんなにも美味しいものがあるんだ」

「ほう、貴様にはワインを嗜む趣味があったのか？しかし、何を当然
のことを言う。我が見定めた品々だ。当たり前だろう」

「見様見真似だけだね……」

再びワインに口を付ける。舌の上で転がすように味わう。幸せと
いうのはこんな時にある言葉なんだろうと再び私服の味と時間をか

み締めるのだった。

その間にも弟子Aはキュンとしていた。ただし恋愛要素は皆無である。

「だが、魔王という存在をただの悪で馬鹿で馬鹿で危険で馬鹿で危なくて馬鹿で強いのか弱いのか微妙な雰囲気醸し出している変態だと思ってたが、少しだけ見直した弟子Aであった」

「声に出てるううう?! 貴様あ!! そんな風に我の事を見ておったのか! この魔王たる我に対し、何度馬鹿を挿入するか! この痴れ者が!」

若干涙目になりつつあるも、だいぶ耐性が付いて来ているのか。慣れてきているのか反論もしっかりとしてくる。

「えーっと、1、2……よん?」

「回数など聞いてないわ! 戯けが!」

「冗談冗談。今回ばかりは本気ですごいと思ったよ。最初に会った時と同じぐらいすごいって!」

素直に賞賛する。相手は魔王だが、食事の工面をしてくれたのだしこれぐらいはいいだろう。

その言葉にフンと弟子Aから視線を逸らし、魔王は何だか頬を染め、照れている様子だった。

「うん、気持ち悪いから、やめてね♪」

魔王は、涙したという。

——そして、目の前の品々は全て胃袋へと消えていった。

「ご馳走様。さーって、行きますかっ」と

「ふん、やれやれだ。我が居なければ貴様などここで野たれ死ぬ運命だったな」

「お前がいなかったら、ここまで苦勞する日々はこない運命だったんだけどね。それはそうと、ありがとう。……あの料理ってそういうばどうしたの?」

「感謝は当然の事だ。言うのが遅すぎるわ! ……しかし、言っていなかったか?」

「何を?」

きよんとする。

「ふむ、貴様の身体を使い、お金を支払い、きちんと購入してやったぞ。もちろん我を見た者は消去しておいた。安心しろ」

「ん?」

「む?」

「え?」

「ふむ?」

「えゝっ」

「ふむ!」

色々とおかしな事を言う。なぜか、威張ったように腰に手をあて鼻息を一息させる魔王。

「お金を支払い?」

「うむ、その通りだぞ」

慌てて財布を捜す弟子A。

どうにも、財布の中身が減っているようだ。少なくとも500Gは使い込んでいる。

魔王の癖になんて律儀なっ!とは、決して思っていない弟子Aだ。ほんとだよ?

「ボクを見た者を消去した?」

「違うな、我を!だ。そこを勘違いしてもらっては困る」

「分離して移動を?」

「出来るが、そんな事をしたら、我の姿を見て下さいというものではないか。一つの里を滅ぼす羽目になるわ」

何をバカな事と言うように、魔王は言い放つ。

「じゃあ、お前はボクの身体で人を殺めたのか!?」

衝撃だった。いきなり殺人犯になってしまった。

所詮、魔王だった。価値観が違いすぎる。命を一体なんだと思っているのだろうか。

弟子Aとしても指名手配なんて事になるのだけは避けておきたかった。

この未曾有の危機を回避しようと、既に煙を上げている脳を酷使し何とか突破策をシミュレートする。

「勘違いするな、消去は記憶をだ。金は払ったし何ら問題はない。ああ、食器分も込みでな」

「……はい？」

「貴様は馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、我が言葉も分からんほどとはな、難儀な耳を持っているな」

さきほどのお返しとばかりに言つてのけるその顔は、得意げで……イラッと来る。

「あーのーなあー！ー！」

一言で言えば、アイアンクローだ。

まさにそんな状態。ちなみに、魔力で強化したそれは、弟子Aの力は元々非力であったが、今はかなり強力にしていた。

「ぎゃああああ！？」 待て、待て待て待て！？ 我が一体何をしたというのだああ！？」

「ごめん、耳が難儀しててね、全然聞き取れないや」

叫ぶ魔王、弟子Aは薄い笑みを浮かべている。しかし聞く耳を持つていなかったために力は尚込められる。

「ぐおおおおおお！！！！ ごめめめ、あや、あやまあっ！？ だめ、だめだめ！ 頭蓋骨が頭蓋骨にひび、ひびいいいびびび！！やめえ、やめろ！ バカっ！ なぜ故、我がこのよっ……ぐぎいい！！ 痛い！！許っ……！！」

魔王の意識が途絶えたかのように、がっくりとうな垂れている。

「正義は勝つ」

なんと 弟子A は 魔王 に アイアンクロー を 仕掛け
勝った。

こんな歴史が残るのかと思うと、魔王に破れてきた歴戦の勇者達
は後悔しても後悔しきれないだろう。

「しかし、記憶消去なんて便利なものがあるなら最初から言っ
てよ！
！ どんだけ、ボクが苦心したと……あれ、魔王？」

「……」

返事がない、ただのしかば――

「ぎゃー！ か……回復魔術う！」



急いで掛けなおし、何とかギリギリの所で魔王が生還する。

「おお……貴様らは……我に破れし勇者ども……何、お礼参り
？――やってやろ……うう、ここは……」

あの世で、倒してきた勇者との第2ラウンドでも始めようとして
いた所でこちらへと戻ってきた様子だった。

「ふう、危機一髪」

「既に一線を越えてた気もするのだが……」

怪訝そうに弟子Aを見つめる魔王。その視線には、非難の色も灯
っていた。

「ま、まあ……ははは、ほらそう、まあ、お金の件は水に流すし！
さーさー出発だー」

慌てながら弟子Aは港町へと歩き始めたのだった。

「納得がいかんー！ まったくいかんぞ！！ 貴様あ！ 我がきつちりと白黒はつきりさせてやるわ！！」

狂犬のようにうーうーと唸りながら、弟子Aにポコポコと音を立てながら殴り続けている。

気持ち悪い光景だというのを除けば、何とか耐えられるため今回ばかりは、耐える事を選び弟子Aはうな垂れるのであった。

一応食器も回収しておく。売れば資金になるかとも思ってた。



一応の落ち着きを取り戻した魔王。地味にポコポコと痛かったが、苦痛を浮かべる弟子Aの顔を見て満足したのだろうか、今は割と大人しくしていた。

「それはそうと、料理はどこから買ってきたの？ まさか、あの村からじゃ！？」

「ふっ、我を愚弄する気か？ あの事態は貴様の記憶から引き出し確認済みだ。我はこの先にある港町から料理を頂いてきたのだ」

「何か、さりとんでもない事を口走ってる気がするけど……これから行く港町にそんなお店あるんだ。また食べたいなあ」

あそこまでの料理は、弟子A生まれて初めての体験だった。

今度はちゃんとしたお店で食べれば雰囲気も相まって更に美味しく頂ける気がした。

食器分も含めてだから幾らか分からないが、かなり値段が高すぎるというのはネックであるも、それだけの価値を見出す事は出来るだろう。

「しかし、ちゃんと魔王も考えてるんだ？ 村に行ったら万が一って事もあるしね」

それに、あれほどの味を出す店も村にはないだろうと思っていた。
「言っただろうが、我を愚弄するなど。我ほどになれば、海を渡る
事など容易いわ」

「ん？」

「何だ？」

「いや、海？って、港町？」

「そうだが？」

「え？」

「貴様、一体何が言いたい？」

「いや、分かったたよ。この先にある港町って。うん、ボクもいつ
突っ込もうか考えてたよ」

「ほう？」

「そりゃもう、港町について、ここが我の来た〜とか言った時に、
おい〜！みたいなね」

「ふむ」

「で、何でここまで戻ってきたんだー！ってさ」

倒れた場所までわーざわざ、魔王は戻ってきてたのである。こうい
う時だけは、迷子体質が発動しない都合のいい魔王である。

「ありがちな」

「うん……で、海を渡った？」

「そうだ。港町というだけあって、でかかったぞ。人間の一都市に
してはまあまあだ」

「いや、えっ？」

「貴様は本当にイチイチ何が言いたいのだ。はっきりしろ！」

弟子Aは息を思いつきり吸う。深呼吸ではない。

「お前はどこまで言ってきたんだあああああ！……！」

魔王も一度体験済みのため気絶する事はなかったものの、じくじくと来ている様で、少しふらついている。

「ぐうううう、貴様は！ 何度怒鳴れば気が済むのだ！？ それに言っただろう。海を渡って港町へと！！」

「海を渡ってって！ おまっ……お前は、東の大陸の港町じゃなくて、西の大陸の港町まで行ってたのか！？」

魔王の居城に帰れないような魔王が、ちゃんと港町に着ける訳もなかったのだ。

しかし、それにしても大陸すら違うとは一体どういう迷子だ。

どうやって海を渡ったともう、正直ツツコミが間に合わないほどだった。

「そんな事で貴様は、我に文句を言っていたのか！ 我はただ、食事を取らせるためにわざわざ貴重な魔力を使い移動して買ってきたというのに！！ 何とも我儕な人間だ。我が貴様に取り憑いてなければ即、消し炭にしている所だ！」

「……………はあああ、もう突っ込む気力もない。とりあえず先急ごう」

色々怖い事を言っていたが、がっくりとうな垂れて、魔王がぎゃーぎゃーと喚いている様子など気にしないで再度歩き始めた。

此度125年8月18日

午後3時を過ぎた頃であった。

世界が闇に覆われるまでのタイムリミット…十三日やで！

第7話：弟子Aと空腹（後書き）

弟子A現在の装備

武器…木の杖

防具…破れた布の服

左手…全裸の魔王

所持金…2240G↓1740G

所持アイテム

幾つかの薬草

高級食器一式

ここまでお読み下さりありがとうございます。

第8話：弟子Aすごい頑張る

この物語は！

魔王を討伐するためにある国が勇者を選定し、その勇者に世界の命運を託し切磋琢磨し苦難に満ちながらも仲間達と協力し魔王を退治する勇者を探す事を辞め、魔王を居城まで運ぶ話だ！

遠くで、日が沈むのが見える。

回りも、村に居た時と違い、近くには森もなく、平地が続く、彼方には日が沈んでいく夕日が見える海もあった。

どれぐらい進んだか、港町にはだいぶ近づいただろう。足取りは最悪だったものの、何とかここまで来た。

「むっ、敵だぞ。人間」

その一言に……。

「……えっ」

対応しきれていなかった。

ここは、街道で見晴らしのいい場所だ。一体どこに敵がいるのだというのだろうか。

疲れからか注意力も散漫としており、完璧な警戒とは思ってなかったものの、それなりに力は持っている弟子Aは、油断している事実込みで、問題なく対処出来ると思っていたのだ。

言っただけだが、弱いモンスターしか出ない地域で負けはありえなかった。

今まで出会ったモンスターは、スライム一匹だけだったのだから。

しかし、既に弟子Aは自身がそのありえない事を体験している事実を忘れていたのだ。

そう、その声を聞いたにも関わらず、左手……魔王というありえない存在と出会っていたことを――。

身体がいつの間にか引っ張られたように動き、視線を、元居た場所に向ける。

地面から研がれた刃のような大きな氷が布の服の一部を貫いていた。

「ぐっ――」

左手の魔王に身体が大ききさっきまで居た場所から引かれていた。身体が動いてなければ、弟子Aは確実にやられていただろう。

「何をしておるか、馬鹿者！……どうやら敵は一体だけのようだな」

身体に痛みが走る。別に傷つけられた訳ではないが、既に全身疲労だ。

「敵って……一体どこから！」

視線を左右に向けるも見当たらず、嫌な感じはあるのだが、殺気も特に感じなかった。

「ほら、次が来るぞ。ボヤボヤしてれば死ぬのは我も一緒なのだ、キビキビ動け、愚図が」

「っ……！」

再び、地面が少し盛り上がり、氷の刃が串刺しにせんと幾つも突出してくる。

左手の魔王に文句を言いたいのが、今は一番の危険に注意を向ける。

悲鳴を上げるように軋む身体を無理を押してでも動かし、後ろに下がる毎に苦痛で顔が歪む。それらを全て避けると、右手に持っていた杖を掲げる。

「見晴らしのいい場所で、殺気も消えてて、姿も見えない！ しかも、この周辺で魔術を使う魔物なんて多くはいない……！」

「ほう、ならば答えは如何に？」

「ゴースト！ 人間と見ると、ただ何の意味も持たず、すぐ襲ってくるしね。ぐう……身体痛い」

「ゴースト……か。なかなか勘が鋭いではないか。さて、その対処は？」

もう無理と言わんばかりに、悲鳴を上げている体を見視し、掲げた杖を振り下ろす。

「我望むは、汝の黄泉への案内。ならばその声に応えよ！」

「神聖魔術での還元か。面白いではないか」

多くない魔力残量から、魔力を献上し、弟子Aの足元に、魔方陣が瞬時に展開。

アイアンクローなんかは魔力を使うんじゃないかと若干の後悔を抱きながら……。

その間に、目を開けているのも辛い状態での視界に映ったのは、確認出来るだけで、三十もの槍の矛先を象った氷だ。それらは虚空に出現し、弟子Aを全て正面から狙って飛来して来る。

幸いに、距離もあり、現在展開中の魔術効果範囲内でもあったのはありがたかった。敵はそこに居るという新たな確信を得ながら……。

しかしながら、今対処すべきはあの氷の槍が先だった。

「何だよ、あの数っ！？ ぐうう、炎の壁よ！」

「ほお……」

既に別の魔術を一種類詠唱中のモノを保留し、かつ中級魔術の詠唱を破棄し、効果は薄いにしろ発動させるソレは、常人では考えられない事であった。

魔王もそれが分かっているらしく、感心したように眺めていた。しかし、この一手は更に消費し続けている魔力と苦痛を加速させていく。

「偉大なる預言者にして天才魔導師の弟子を舐めるなよー！」

魔力消費が激しくなるにつれ頭痛も増し、顔を歪めながらも、初の見せ場と言っているいい場面のためか、格好良い姿を披露出来ているからか、なかなか調子が良かった。

自身の正面に展開された炎の壁が、接近してきた氷の矛群を全て溶かし、蒸発させて行く。

「調子に乗りすぎだ。足元がお留守になっている……世話が妬ける」「なっ！——っ」

寒気がした。炎の壁の内側……弟子Aのすぐ足元からうっすら氷が見えたのだ。

二度目の決定的な油断をしてしまう。うっかり属性でも付いているのだろうか。

身体は限界を超え、もう石になったかのように動かない。立っている状態を維持するのがやっとだった。

「（動けえええ！）」

だが、意思に反して身体は動かず、地面から出現した氷の刃を、ただ眺めるしかなかった。

そして瞬きをした刹那、魔王が手を下の方に向けているのが見えただけで、何をしたのか理解出来なかったが氷の刃は、消えていた。「クククッ、我には下級魔術など効かん。……幾つの貸しになるやらだな、人間？」

助かったと安堵のため息を付きたいものの、意識を一瞬で切り替える。

「っ……なれば、我が導きに従い、汝を黄泉の門へ送り返さん」

背後から、嫌な気配がするも振り向かず、握る杖に力を込め、弟子Aは別の呪文を唱える。

「次は、後ろから来てるぞ」

楽しそうに顔を歪めながらこっちを見ている。実際には魔王の顔など見てないが、間違いないくそう笑っていると断言出来る。

「――（言われなくても！）大地よ、大地よ、大地よ、我が願い届けたまえ、我が祈り通じたまえ！！」

「次は、精霊魔術か。多彩な催しではないか」

魔王が何か喋っているようだったが、頭が割れそうな痛みが襲ってきてそんなのに意識はさけなかった。これ以上の魔力消費は、自身の身体と共に脳も警鐘をならしている。

既に魔力も底を付かんとばかりに消費しているのが原因だ。普段ならこれぐらい問題ないのに、魔王にとんでもない量が吸われているみたいであった。

無数の氷の矛が飛来するよりも速く、周囲の地面が生きてるかの如く動き、それは背後に生まれた無数の氷の矛を正面に捉えるように回転し、さきほど生み出した炎の壁が迎え撃つ形となる。

――刹那、炎と氷がぶつかり合う！

拮抗状態は生まれない。だが無限に生み出されているとも思われる氷の矛が、何度も炎の壁にぶつかって霧散を繰り返しながらも炎の勢いを削り取っていく。

「このままでは、量で圧倒されるぞ？」

「ううっ……我は送り手なり、我は送り手なり、我は汝の送り手なり！」

既にあらゆる身体の一部が引き裂かれるかのような痛みで意識を手放しそうになるも、踏み止まり、底を尽きかけていた魔力を放り込む。

完成した魔法陣が更に大きくなり、辺りを眩い光が包み込んだ。

全ては、なかったかのように何もなくなっていた。

嫌な感じも、氷も炎も魔方陣、動いた地面、全て何もなくて元に戻ったかのような感覚。あるのは、さきほどまでの景色と、四体満足
の弟子Aと左手の魔王、そして破れた布だけであった。

「あゝあゝあゝ、つつつつ！ 身体があああ腕があああ！！ 頭があああ！！！」
痛すぎるううう！！！！」

杖を放り投げ、弟子Aはもう限界とばかりに道で転げまわっている。

言葉の内容とは裏腹に元気そうにも見えるが、実際に限界を超えた状態であった。

「アレだけ無茶をすれば当然だな。そんな身体と微量の魔力で、同時に魔術を三つも展開とか、貴様は天才なのか馬鹿なのか……まったく、楽しませてくれるわ。しかも関連もせぬ魔術をだからな。神聖に、黒魔術に、精霊魔術にと……貴様、なかなか素晴らしい逸材だな」

魔王が、今更ながら、興味深そうに弟子Aを見ている。偉大なる師匠の弟子Aは伊達ではなかった。

ぐるんぐると弟子Aが転げ回っているのだから、左手の魔王も、同様の状態であり、冷静に分析しているその様は、少し滑稽にも見えた。

しかし、逆に何ともないように話すその姿は、ある意味、すごくもあった。

魔術と一括りにしてはいるが、系統やらあるのであった。魔術講座はまたいずれ。

「あああああー。もう、もう一步も無理無理、これ何、全身やばすぎるうううう！？」

「ククッ、面白い物を見せてもらったからな。その痛みだけは取ってやろう」

魔王はちっちゃな手で指を鳴らそうとして、何度しても失敗して

いた。

何十回目かの挑戦でやっと鳴ったのか、満足そうな顔をしながら弟子Aに魔術をかける。

「はやぐううう！——ううううう……う？あんまり痛くなくなった……？」

ピタッと動きを止めると、身体が少し軽くなった。先ほどまでの痛みはあまり感じないのである。

「クッククック、全快ではないにしろ、これで港町まで行けるだろう。さっさと、歩くといい」

何がそんなに機嫌の良いのか、久々の笑いを浮かべながら魔王は弟子Aに促した。

「ぐう……ありが——とう」

恥ずかしそうに、それだけ呟く。

魔王は、ただクックと笑うだけであった。

地面に落ちていた杖を拾い上げ、土を払い落とすと、再び歩き始める。

「はあ……。しかし、どうしていきなりゴーストなんか出るやら、そもそも戦闘真面目すぎるでしょ……死んじゃうかと思ったし」

事実、弟子Aは左手の魔王に二度、死を回避させてもらっていた。

「……」

日が落ちかけていたとはいえ、夕方だ。ゴーストは夜々深夜が本領を発揮する。

決して存在出来ない時間帯でもないが、出来て人を脅かしたり、驚かしたりが精々という所。

こんな時間帯に、低級魔術のオンパレードが出来るほど強力なゴーストも稀である。

「この辺りじゃ、十分に強敵クラスじゃないか……街道にあんなの

が出てたら、結構噂になってると思うんだけどなあ」

更に言えば、街道などで出ることは滅多にない。そんな遭遇する事すら稀なゴーストが街道まで来るというのは、弟子Aの不幸体質が成せる技なのかもしれない。

とはいえ、それ以上の稀である魔王と遭遇してるので、ある意味で当然かもしれないが……。

「……」

ぐったりした様子で、片手で杖をつきながら、ゆっくりゆっくりと歩いて行く。

「って、噂すら聞く余裕もなく出てたんだった。村で情報収集が出来てれば……。せめて、きちんと休めていたなら」

「……」

「さつきから、黙って何か良からぬ事でも……」

怪訝そうな顔で左手の魔王を見ると、何時になく真剣な様子で考え事をしているようだった。

「……貴様らがゴーストと呼称するアレは、それなりに瘴気を与えると活性化するのだ、人間よ」

「――あ」

弟子Aは聞いた事があった。ゴーストとはあまりどういった存在かは分からないが瘴気がある場所に多く、そしてより強力であると「影響が出てきている……?」

「かもしれんな。単に偶然、貴様らがゴーストと呼ぶ存在が、強かったというだけかもしれないが。もしかすれば、我が眷属になりたくて馳せ参上したのかもしれないがな」

「仮に後者ならとんでもない歓迎の仕方だね。ボクは嬉しくて思わず全魔力をつぎ込んでホーリーぶち込んだじゃう」

「うっ……」

嫌な事でも思い出したのか、魔王の顔が歪む。

「というか、魔王ならゴーストも含めて眷属なんじゃないの? おかしいでしょ、一応魔王? な身体のボクを襲うっていうのも……こ

れでモンスターにも注意しなきゃいけないのかあ」

「アレが眷属？……ククツ、さあな。我とて魔王だが、決して万能という訳ではない。それに言うが貴様らの中にも、王に対して全ての民が、一切の不満もなく忠誠を誓っているとでも言うのか？」

「むう……」

魔王の癖に、いや魔王だからなのか、とんでもなく痛い所を突いて来ると思った。

人類という種で見て、全てが一枚岩ならば色々な柵もなく、一つの国家のみが出来ていただろう。

「貴様が思った通り、そういう事だ」

弟子Aの心を見透かしたようにそれだけ言うと言王は再び口を閉じた。反論はしたいものの、いい言葉も見つからず弟子Aもまた口を閉じるしかなかった。



日が落ちた頃合いに港町に付く事に成功した。

「ボク、もうゴールしてもいいよね……」

「……」

左手の魔王は、返事をしない。

ココに来るまでに、破れた布を使い包んでおいたのだ。

街の守衛か分らないが、槍と鎧に身を包んだ人達が怪訝そうにこちらを見ていたが、何も言われなかったなのでそのまま横を通り過ぎ、街へと進んでいく。

目指すは宿屋。港町は、港を中心に漁業が盛んでなかなか新鮮な魚など美味しい海の食材が手に入る。特に東の大陸と西の大陸を結ぶ唯一の交易場として、露店など、珍しい商品が数多く並んでいた。

大通りに入ると、まさにそこは人、人、人。まだまだ日が落ちたにも関わらず、行き交う人の目を惹こうと、商売人の呼び込みの熱気は、眩しく輝いているようであった。

しかし、弟子Aは少し回復しただけであるので、買い物などする気力もなく、本気で宿屋ですぐ寝たいのである。

大通りを突っ切るのには体力が必要すぎると判断し、真っ直ぐ行くのは避けて、別の道を探していると運が良い事に、宿屋を発見する。

しかし、なかなかにかい建物であった。他の建物の軽く三倍ほどはあり、他の外観とは全然違うそこは、まさにこーきゅー宿屋……ホテルという感じであった。

「場違いな気がする……」

それでも仕方ないので、弟子Aはその宿屋まで行き扉を潜る。

「いらっしやいませ」

入ってすぐに声を掛けられる。こういうのには慣れていなく、少しオドオドしてしまう。それに、入り口傍に人が居るのに驚きだ。

「あ、どうも……」

少しじつと弟子Aを見ていたが、失礼と思ったのか、宿屋の人がすぐ頭を下げる。

内心ドキッとしたが、構わずフロントまで歩く。結構距離があるのに更に驚きだ。

「いらっしやいませ、当宿屋へようこそいらっしやいました。ボロ……んんっ……お客様」

恭しく、フロントの宿屋の主人……ではなく、何人が居る雇われただろう人の一人が声を掛けて来る。

だが、一瞬目の前の受付の人の心の裏が垣間見えるような発言が聞こえた気がする。幻聴と思っておこう。

「一泊したいのですが……」

自身の財布の中を確かめる。

所持金…1740G

「……お客様、当宿屋にはお泊りになった事はありませんでしょうか？」

「いえ、ないです」

「……お客様、失礼ながら当宿屋は、その、サービス、お食事など、お客様に対して誠心誠意快適にお過ごしに出来るよう配慮しています。あの、どうしても質を上げるためにそれに見合った対価になります……」

「はあ……それで（正直さっさとお金払って寝たい）」

色々と限界に来ていた弟子Aは、まさかここで、待て！を喰らうとは思ってもみなかった。

いつもの弟子Aならば、自分の格好の事を思い出し、相手の言いたい真意を悟って、さっさと退散をするか、所持金を見せるかしてすぐに、引くか押すかを選択していただろう。

「えーっと、そのですね。お客様、持ち合わせの方は大丈夫でしょうか……本来ならばこのような事はお聞きにならないのですが、申し訳ないです」

頭を深々と下げつつ、目の前の人が言ってくる。

「……ああ（眠い眠い寝むすぎるう）」

ようやく理解に成功する。杖を置き、空いた手で財布をフロントの目の前に置くと、何か重い音がする。その元凶である、財布の中身を見せる。

「こ……これはとんでもない失礼を！」

更に頭を下げる。

「気にしないで。で、お幾らかな？」

「一泊、200Gになります」

「そう。……はい」

正直高すぎると思ったものの、既に弟子Aの思考は眠気、疲れ、魔力消費も相まってまともではなかったため、あっさりと支払う。

「その君、お客様の荷物を」

支払いを確認したフロントの人が、入り口に居た人を呼ぶと自分が泊まる部屋だろう場所のカギを渡すと、弟子Aの木の杖と高級食器が入ったアイテム鞆を受け取る。

「それでは、お客様こちらへ」

少し驚いた様子の荷物持ちの人が、弟子Aを部屋までエスコートするのであった。

「いやー驚いた驚いた。まさかあんな子供、あんなに大金持っているとは」

「どこかで盗んだんじゃない？」

「あー、怪しいかもしれないなあ。一応連絡入れておこうか」

「……そうだな。ひとつ走りしておいてくれ」

「了解です」

そうしてフロントから、一人姿を消す。疲れた表情をして破れまくっている布の服、木の杖、そしてボロボロな布で覆われた左手。怪しさ満点の空気を放っていたため、断られても仕方なかったがお金を出してきた客に対し、断るとするのはプロフェッショナルではない。

意外にも、対応したフロントの人はそういう部分を持ち合わせていたのだ。

「それではごゆるりとお休みくださいませ。お荷物の方と部屋のカギは、テーブルの上に置いておきますので、失礼致します。何かありましたらフロントまでお申し付け下さい」

一礼し、荷物持ちの人は、室内から退室して行く。

部屋は、値段に見合う……一言で言えば弟子Aが今まで住んでいた家より広かった。

家というよりも、一室であったが、ここは豪華なものも含め、素晴らしいものだ。

しかし、そんな外観や設備、窓からの景色には目もくれず、でっかいベッドへと飛び込んだ。

ふわふわとしており、仰向けの身体が沈む。

「ふわああ……最高。こんなベッドで寝るの……初めて……ぐう」
素晴らしく早い寝つきであったが、今日起こったことを考えれば当たり前なのであった。

「もう、しゃべってもいいのか、人間よ？……ん？人間！……無視とは良い度胸だ」

「ぐうー……ぐうー……」

「むう、真っ暗で何も見えないじゃないか。……む、寝てるのか。ククツ、それでは邪魔は出来んな。精々、我が魔力の供給に役立ってくれ」

布で包まった魔王が、布から抜け出す。

その目に映ったのは寝ている姿だったが、あえて眠りの許可を出すも既に弟子Aは睡眠の中。魔王もまた目を瞑り、自身の回復へと勤めるのであった。

此度125年8月18日

午後10時を過ぎた頃であった。

世界が闇に覆われるまでのタイムリミット…十三日をきりそう

第8話：弟子Aすごい頑張る（後書き）

弟子A現在の装備

武器…木の杖↓なし

防具…破れた布の服↓ボロボロに破れた布の服？

左手…全裸の魔王↓布が巻かれた魔王（布は脱着可）

所持金…1740G↓1540G

所持アイテム

木の杖

幾つかの薬草

高級食器一式

宿屋のカギ

弟子A最後の見せ場……になるかは、まだ分かりませんがここまでお読み下さり、ありがとうございました。

第9話：弟子Aの港町での朝の出来事

この物語は！

魔王を居城まで運ぶまでに、立ち寄った港町で夜を明かし、朝になり、魔王様がすんごく、すんごくとってもいい話（魔王談）な、ハイパーウルトラグレートマグナムアルティメット（HUGMA）超度級の長編第1話：魔王の華麗なる一日！のお話が省略されるお話である！

気付けばふわふわのベッドの中だった。窓からは、暖かい日の陽が入り込んでいた。

「あれ……ここはあ」

「起きたか、人間」

「ああ、朝から気持ち悪いモノが見える……」

「きーさーまあーはー！ 毎度毎度同じ問答をせねばならんのか！

まったく、口が減らん奴だ！」

不機嫌そうに告げられても、なんのその。弟子Aはまだまだ頭が働いてなかった。朝はパツと起きれる体質ではないのだ。

ゆっくりと昨日の記憶を辿り、徐々に思い出していく。

「あー……宿屋に泊まったんだっけ」

「ぐべええ！」

変な音を魔王が立てながら、身体をベッドから起こす。

部屋は、相変わらず豪華絢爛。貴族やらお金持ちが如何にも好みそうな、感じであり、専用な空気を纏っていた。

「今更ながら、かなりお金使っちゃったな」

基本宿屋など宿泊施設は素泊まり設計なので、10Gほどである。サービス、食事込みとはいえ200Gといえば大金であった。というより、国から出た旅の資金が120Gなので、昨日の食事代や宿屋代も払えない額とは、とんでもなく守銭奴だ。

「はぁ……ボクがこつこつ貯めたお金が、見る見る減っていく……」偉大なる預言者にして天才魔導師の弟子Aは、付随し一緒に仕事をこなしたり、予言……という名の占い師の真似事をしたり、魔物退治などをこなして地道に貯めていっていたのである。

実を言うと、もっとお金を資金を持っていたのである。貯めている理由は内緒。しかし、師匠が亡くなる以前、何度か弟子Aが貯める貯金箱が奪われるという、事件があったのである。

悔し涙で枕を濡らし、犯人を突き止めようとするも師匠から止められ言われた一言。

『こ……これも、し……試練！　そう試練じゃとも。罪を憎んで人憎まず。弟子Aよ。強く強く生きるんじゃないぞ？　ほれ、ワシからお小遣いをやろう』

と、盗まれたお金の10分の1程度のお小遣いを頂く事もあった。師匠の優しさに思いを馳せる。師匠は、その後、新しい本を幾つも買っていたけど、良い収入があったんだろうと思う。

「……そうだ。あの時だって頑張れたんだ。これも世界のため頑張るか！」

気合を入れ、改めて頑張ろうと誓うのであった。

「お前はぁ！　本気で我を愚弄し、馬鹿にしておるだろう！　また顔に重負荷が掛かったわ！　貴様わざとだろう？　わざとやっているだろう！？」

「ふえ、うん、そうだよ？」

「きさつ……まあ！」

何だか左手の魔王の目がぶわっとうるうるとしてすごく気持ち悪い。いやもう、本当に気持ち悪い。

「うええ、きもっ……」

思わず発言してしまう。しまったという気持ちも少しは持ち合わせたが、実際この様子を見れば誰もが同意してくれるはずだ。しかし、魔王の怒鳴り声が来るだろうと思ったが、予想を覆す展開になる。

「うわああああー……ん」

魔王は大泣きする。我は魔王なのに、魔王なのにと何度も何度も言いながら、目が三つも無駄にあるせいか、まるで泉でも出来てしまふかの如く泣く。あまりにも予想外すぎて弟子Aも困惑を隠せずあわわ、あわわとしてしまう。

「じよ、冗談だって!？　ほんと冗談だからね? ね?　魔王!　魔王様?　泣き止んで?　ほらほら、カッコイイですって!　本当にもう……子供じゃあるまいし……」

顔身長とも子供レベルを貼られるような弟子Aから、見事に子供呼ばわれされる魔王。

「うわああああー……ん」

その人物からの……子供じゃあるまいしと聞いた途端、更に大泣きになる魔王。

朝から疲れると言わんばかりに、盛大なため息と共に、弟子Aはさっきの誓いを撤回したい気分であった。



その後、怨念じみた泣き声が聞こえるとかで、宿屋の人が来たりもしたが何とか誤魔化す事に成功していた。

「まあ、貴様が臣下の礼を尽くすというから、我も貴様の望み聞き届けてやらん事もないわ」

尊大な態度であるが、涙の後が残る魔王の顔は見ない事にする。

臣下の礼と言いますか、とにかくとにかく下手に、下手に出て、褒めて褒めて褒めちぎって、何とか落ち着いてもらうことに成功する。

「それはよかった。——んんっ！」

身体を伸ばす。きちんとしたベッドで寝れたおかげか疲れもかなり取れていて、頭の方もすっきりだ。首を回しながら身体を動かしていく。

「良いベッドはやっぱり違うんだなあ」

今回ばかりは体力回復重視という観点で見れば、この宿屋が一番良かった選択なのかもしれない。

「さて、食事をして情報集めをしようか。魔王の城の場所探さないとだ」

ついに目的に近づくための行動が出来る事に少し前進出来るんだなと嬉しくなる。

「ふむ、その通りだ人間。さっさと我が居城を探してまいれ」

「はいはい……あー、いえ。了解致しました。魔王様」

また泣きそうになってる気持ち悪い魔王を、見て言葉を正す。

「それでは申し訳ないですが、布をおかぶり頂いて、発言の方は他の人間に見つかる御身を危険に晒してしまう愚を冒したくないの

で、遠慮頂く様お願い致します」

「うむ、良きに計らえ」

それだけ言うのと左手の魔王が見えなくなるように布を巻く。黙ってそれを受け入れてたという事は、こちらの願いを聞き届けしゃべらないで居てくれるのだろう。と期待する。

『てすてす、マイクテスト』

「え……？」

『繋がっているようだな』

「ええ……？ 魔王……様？ え？」

視界に入る左手の魔王は口を開いていない。と思う。布を巻いて分からないからだ。

しかし、声が直接頭から聴こえるのだ。

『ククッ、我を内包した身体だ。寝ている間に、少し弄ってやればこういう会話も出来るようになる』

「一体ボクの身体に何をしたんだよ……」

『なぁに、我への魔力供給のラインを利用して念話を出来る様にしたのだ。人間、貴様も心の中で念じてみる。我への発言を許す』

「ぐう……」

言いたい事はたっぷりだが、外に出ようとするタイミングで、更に時間のロスは痛い判断する。とりあえず、言われた通りに心で念じるように魔王へ話しかける。

『めんどく……げふんげふん……これでいいのかな？』

『む、何か最初に言わなかったか？ 念話で咳き込みなど不要だ。まあ、及第点をやろう』

『ありがたきお言葉感謝いたしますつと。じゃあ、そろそろ出掛けようか』

『うむ』

木の杖は、部屋に置いていく事にする。片手が塞がっている状態

というのはそれなりに大変なのである。魔王が荷物持ちをしてくれる訳もない。

「さてと、朝ごはんを食べて……情報収集と、装備整えなきゃなあ」
改めて城を出てからの自分の姿を思い出しながら現状を見る。

武器…木の杖↓なし（部屋に置いてきているため）
防具…布の服↓ボロボロに破れた布の服？
左手…普通↓泣きはらした後のある魔王

所持アイテムには、複数の薬草と、高級食器一式……。
一体どんな激しい旅をすればこうなるのやらだ。実質まだ三日目だ。

そして、このまま行けば確実に布の服は、なくなるだろう。それだけは避けねばならなかった。確実に防具……

「ボロボロに破れた布の服？……最後の？ってなんだよ……」
しかしながらすぐに合点が行く。自分の格好を見て、これは先に服ゲットだなと新たな誓いを生み出しながら……。



この宿屋には、専用の食堂があり朝ごはんはそっちに寄って、朝ごはんを美味しく頂きました。

『やー、ここの朝ごはんも美味しかったなあ。バイキング形式だったから好きなのばかり食べちゃったよ』

『……む、何か展開が切られてないか？』

『へ？ 普通に美味しいバイキングだったじゃないか。さすがに高級宿屋。食事の方も値段に見合ってるね。バイキングを馬鹿にしちゃいけなかったよ』

『いや、待つんだ人間。それは知っている。我も少し欲しいな。って思った。って違う！』

『んん？ ……もしかして、あれだけ食べてどうして身長が伸びないとか……言わないよね？』

布越しからでも分かる殺気を左手の魔王は感じていた。

『断じて、そんな事は思っておらんわ！ 違う！ 違うのだ！ ほら、何か大事な事忘れてないか？』

少し身の危険を覚えたが、そんな事は魔王にとって実に些細な事であった。

『私の超ありがたいお話は、あれ？ 朝食中に、我がすごく良い話したよね？ ね？ あれ？』

『ああ……ええ、そりやもうたつぷりと、時間を取って話してましたよ。正直食事を早く済ませたいほどに』

『本当に？ はいば。で、うるとら。でぐれ。とでまぐなむ。なあるていめ。とな展開が繰り広げられる華麗なる一日を綴ったお話は聞いたよ……ね？』

『ええ、ええ、もう先ほども申し上げましたが、た。っ。ぷりネチネチと耳を塞いでも聴こえてくるのでき。っちり、一字一句聞き漏らさず聴こえていましたとも、ええ』

なぜだか、美味しい食事もあり、お腹一杯で満足なはずなのに、ぐったりとしている弟子A。しかし、魔王はどこか納得していなかったかのように不思議な感覚に陥っていた。

『むむう、おかしい気がするのだが……まあいいわ。また、明日にでも時間があれば、我が話を聞かせてやるわ』

「明日から忙しくならないかなあ……」

思わず声に出してしまうも、魔王は機嫌を取り戻したのか明日どんな高尚な話を聞かせてやろうかと考えでいっぱいだったのである。

フロントまで行くと、カギを預ける事とする。

「これ、お願いします」

「はい、お預かり致します。昨日はぐっすりお休みになられてたみたいですね」

「あ、はい。ベッドに入たらぐっすり寝ちゃってました」

「はは、夕食の際にお姿をお見かけしなかったもので……ごゆっくり出来たのなら幸いです」

一旦言葉を区切り、続ける。

「時にお客様……近頃、窃盗団がこの町に潜んでいるらしく、被害が多発しているのはご存知で？」

「そうなの？」

「……はい、お客様もお気をつけ下さいませ」

「分かりました。ありがとうございます」

フロントの人がお辞儀したのに合わせ、弟子Aもお辞儀をする。

「（しかし、窃盗団かあ。気をつけよう。確実にこれはフラグだ！）」

弟子Aは、自身の不幸体質が既に発動していると自覚し、町に出る際には注意する事にする。

しかし、弟子Aは少しでも勘違いをしていた。宿屋の人達は、窃盗団の一員ではないかという疑いをかけていたのであった。

此度125年8月19日

午前10時を過ぎた頃であった。

世界が闇に覆われるまでのタイムリミット.. 十二日になりました。

第9話：弟子Aの港町での朝の出来事（後書き）

弟子A現在の装備

武器…なし

防具…ボロボロに破れた布の服？

左手…泣きはらした後のある魔王↓布に巻かれた魔王（布は脱着可）

所持金…1540G

所持アイテム

幾つかの薬草

高級食器一式

ここまでお読み下さりありがとうございました。

番外編：弟子Aの出番ほぼなし

この物語は！

番外編です！

ここは、東の大陸でもなく、西の大陸でもなく、もちろん魔王の居城でもない。

誰も知らなくて、しかし、誰もが知っている存在。

神と名乗る存在が住まいし場所。

「あー……暇ねえ」

世界を創造し、世界を見守る存在。人を創造し、人の行く末を案じる存在。

勇者に力を貸した。魔王を封じた。色々な所で伝承が残り、数々の逸話を残す神。

名前は、伝承、逸話の分だけ数々ある。

理由は、その地で出会った人々に、そう告げられたからである。

——そう、この世界には神が居る。

しかし、一人ではないともされるが、実際の所は、この暇を持て余している神一人なのである。

昔は良く人間に肩入れしまくり、無茶をしたものである。

ある時あまりにも人間が、神を頼るようになってしまったからには

行動を控えるようにしていた。なんせ、女神自身の力を使えば、人間に降りかかる無理難題な事も、寝ながら出来てしまうのである。

女神は、聞こえよく言えば、人類という種に期待と自主性、この世界の舵取りを望んだ。悪く言えば、女神が自分で事を起こすよりも、そちらの方が、見てて楽しい事に気付いたのだ。

今は、映し鏡と呼んでいる、水の入った器で下界と呼んでる世界や、過去にあった出来事をTV感覚で見ているぐらいだ。

清々しい空が広がり、ほどよい日の温もりが包み込む。この空間は女神の思いのまま、過ごし易い時期を維持していたのだ。

庭園のような場所には、発言の主が一人。綺麗に整備されたそこには白いテーブルがあり、フォークとナイフ、そしてホットケーキと紅茶が置かれていたのだった。

そして発言の主は、白い椅子に腰掛けながら一人優雅に過ごしていた。

「なーんか、面白い事がないかしら」

神……性別はないとも言われている。

が、その存在が象っているのは、女性だ。この物語の嬉しい事に初の女性人物だ。

緑色の髪は、腰まで伸びており、枝毛など存在しないと言うほどにストレートになっていた。

見る者を、男女、種族問わず魅了してしまうかの如き美貌。それは存在感が成せるのか、そのまま姿形で魅了するのかは分からないが、それほどまでに美しく、神々しかった。

神の身を包み込むは、神々しい姿にも劣るとも勝らない、素晴らしい神秘的な純白のドレスを着ていた。更に出る所は出て、引き締まる所は引き締まった理想とも言えるプロポーションをも誇っている。

た。

全体としては可愛いというよりは、美しいがっている。
ただし、可愛い！って、言ってくれてもいいんだよ？

「と、これでよし」

割と事実だから良いが、女神の都合の良い感じに容姿について書かれていく。

「私の世界でもある事ですし」
会話はしないように。

「はい。……しかし、本当に暇ねえ……」
意外に素直なものには好感が持てるだろう。

だが、女神は紅茶を飲みながらも、暇を持て余していたようだ。

魔王騒動の時は、多くの人間が犠牲になりさすがに心が痛かったが、あの時ほど神冥利に付く事はなかった。

人々は神を信仰し、再び神が力を貸してくれると信じ祈り続けた。その信仰はそのまま女神自身の力に反映される。

さすがに、下界と認識してる人間たちの世界に女神として直接干涉する事は、以前の愚を繰り返し、自分の意に反するが、少しの力を与えた武具の譲渡などぐらいいは大目に見た。

もちろん、それなりの試練。持つに相応しい真の勇者の選定はした上でだ。結果は、魔王を倒すまでは行かないまでも、封印を施す事に成功。しかし、当時の名だたる勇者という勇者は、その封印された地で、ほとんどが命を落とす結果となってしまったのだ。

そんな魔王騒動が終わりこの数百年の間はかなり平和な方だった。

魔王騒動の後、女神が干渉をやめる以前に、片手間で封印してお

いた、伝説と言われるドラゴンが復活した時も、一部の街や村が被害にあったりしたが、それでも全世界を巻き込むという事態もなかった。

しかし、女神には特に印象が残っている事件であった。

なんと、一人の人間がこちらに接触してきた時があった。

さすがに女神もこれにはびっくりしたのだ。ここへどうやって来たのかなど聞きたかったが、その前に、人間が勝手に入ってきたのは不法侵入で、更に運が悪い事にお風呂に入っていて、ラブコメ？と言わんばかりの展開と、その人間に対して怒ったが、話し相手になってくれる人が居るといえるのは嬉しいもので、その件に関しては不問にして、女神の力を使えるよう呼び出し魔法を与えた。

ちなみに、魔法と魔術は別物である。

強力すぎるので、出来るだけ使う機会は限定しておいて下さいと一応の釘を刺してだ。

だが、その人間は、女神の力を用いて一発で倒してしまったのである。

さすがの女神も驚いた。伝説のドラゴンを倒す用に与えたのだから使うのはよかったのだけど、復活したドラゴンとの遭遇時の初手で放ったので、何ともあっけなさすぎて女神も、えー！普通はピンチになってから使うもんでしょー！と子供のように非難したものだ。それに一応、釘も刺していた事も相まってだ。

女神としては、色々台詞を考えていたのである。

劣勢時に、貴方にはあの力があるのでしょうか。今こそその力を解放する時です。などなど強引に念話を送り込もうと考えていた。

そして、見事ギリギリに、伝説のドラゴン不倒すとかとか……その日は、その人間が女神の機嫌を取り、事なきを得たが、もし機嫌

が悪いままだったら一体どうなった事やらだ。

「はぁ……面白い事、面白い事……」

ぱくつと、テーブルにおいてある自分で焼いたホットケーキにフオークを刺し、もぐもぐしながら頬杖をつく。

行儀が悪いが、誰も見ている人はいないので気にしない。

神様の威厳も、美しさも、気品も、愛嬌も、神々しさもあったものじゃなかった。

「……下界の様子でも久々にみよっか」

機嫌が悪そうに虚空を睨みながら思いふける。

ドラゴン騒動以来、録に見ていない……軽く百年は経ってる感じが、気にしないで下界の様子を見る。

もし、女神が気付かなくとも、異常事態があれば知らせてくれる手はずになっているからだ。

「ん……って、えええええ?! エマージェンシー??」

そう、エマージェンシー。

これは、ある人間……ドラゴン騒動の時の人間の上に教えた女神の呼び出しコールだ。

しかし、これが発動されるのは実に百年は経ってのことだ。

幾らなんでも、女神としてはその人間が生きているとは思っていなかったのだ。

「って、えーっと。仕方ないわねえ。えいっ♪」

大きな器に入れられた水の中に写されたソレは、何か見覚えのある存在と、まったく知らない存在だった。

しかし、呼び出されたのなら仕方ないので手助けをするのも、暇だったので構わなかった。

「女神ビーム！」

その瞬間、映像の中の見覚えがあった存在が光に包まれ、多分倒せただろう。

名称については、あえて突っ込むまい。

「えー、可愛いじゃない」

既に、誕生からピー歳の女神の台詞とは思えない。



——ごめんなさい、もう言いません。

「それでよし」

笑顔はまさに女神だったが、目は笑ってなかった。

「さっきのは、何だったのかしら。まあ、あの人が他の人に教えたのかもしれないわねえ」

それはそれで困った事態だ。

料理をしてる時、お風呂に入ってる時、寝ている時、旅行している時に関わらず呼び出されたのではたまったものじゃない。しかし、契約なので出ないわけにも行けないのである。

さきほどの様子は煙がもこもことしており、まったくその様子は見れなかったが致し方あるまい。

「でも、コールが出来るって事は、それなりに才能はあるみたいねえ」

とりあえず、その映し出した場所をブックマークをしておき、別の場所を見る事にする。

そう、久々に似たようなのを見たせいか、あの魔王でも見ようと思っただ。

「元気にしてるかなー」

元気にしてちゃいけないとも思うものの、女神はなぜ魔王が、魔王と呼ばれている事態を知ってはいたし、気紛れに人間に害を成すという意外はそれほど嫌ってはいなかった。

「……え」

女神は驚いた。

「……えええええ？」

女神は相変わらず驚いている。

「えええええええ！！ 何で！ どうしてー！？ 結界が消えちゃってるの！」

思わずガバツと椅子から立ち上がる。

そう、女神の力を与えて張ったはずの力が消えているのだ。

「あれって数千年は硬いと思ってたのになぁ、欠陥あったかな？」

しかし、少しだけこの事態は女神の望んでいた形になってきたのである。

そう、暇というものが解決するんじゃないかという淡い、そして人間にとってははた迷惑な願い。

「ふふふ、面白くなってきたじゃない」

ホットケーキを全て平らげると女神は色々とする事とした。

きつとまた勇者選定があるはずと意気込んで、仕掛けを作ったりとか、台詞を考えたりとか準備が必要だ。

「よーし、まずは勇者に振舞う料理のレパートリーの充実からね
女神の手作り料理ってだけでポイント高いもんね」

ここまで来る用事が出来るか甚だ疑問は残るものの……。

女神は、暇を持て余しすぎてかなり料理その他趣味が多彩であつて、ほとんどの事が出来るのであった。

「あっと、一応アレに連絡しておかないと。結果もなくなってるし、一体なにをしていたのかしらほんと……」

神は一人だが、女神の手足となる僕が存在はあったのだ。

女神の思惑が進む中、物語もまた進んでいく。

神とはいえ、それが女神の思い通り事は成すのだろうか、それとも予想を覆すのか。

それは、弟子Aと魔王次第であった。



そこには三人ほど並んだ人物達が居た。

「え、っ、ボク達出番なし？　　というか、番外編するの早くない！？」

「なしのようだな。我としても今回の話の主役として貴様をちょい役で出してやってもよかったのだがな」

「いや、魔王？　番外編に1mmも出てないですよ？」

「ん、何を言ってる。ほれ、サブタイトルを見てみる。魔王の華麗なる一日って……え、違う？　中身も……あれ、取材したよね

！　取材されたよね？　我を取材しましたよね！？　我が主役って言わなかったか！？」

取り乱しながらどこかへ去っていく魔王。

「よっ……私としては、遺憾だな。メインタイトル通り出番がまだなんだが」

「誰！？　って勇者様！？　勇者様早く来て！　いや来ないで！？」

「おいおい、どっちなんだ？」

「どっちかっていうと、来ないで欲しい……かな？」

今は番外編なので絶賛魔王と分離中。

「……そうか」

少し寂しそうな事情を知らない勇者であった。

そして、何か寂しそうにブツブツと言いながら魔王が戻ってきたのだった。

「私の……私の出番が……」

「……でも、いつ出てくるんでしょうね、ほんと……。先にココに出ちゃって……」

「そればかりは、私にも分からんな」

「……しかし、見れば見るほど貴様は過去にあった勇者にそっくりだな。いや、嘘だが」

「このタイミングで嘘が必要なの！？ バカなの！？ 死ぬの？」

「まあ、気にする事はない。魔王と名乗る奴は大抵バカな考えの奴が多いからな」

「ぐぬぬぬ………貴様らあ！ いつか………！！ いつか覚えておれよ……！！ 我は我は、魔王ガ——ぶあああああるうううううううう——！！？」

「もうう、魔王ったら、相変わらず気持ち悪い体してますね。女神たる私が、もっと可愛らしく作り変えてあげますのに」

「「………」」

「………あー………それはそれで、魔王の元々の姿知っちゃってるボクとしては、接し方が分からなくなっちゃうので困るです」

心底嫌そうに、そう呟く弟子Aであった。

「私も、倒すだろう相手が見た目可愛いというのは、手が出しにくいな」

意見は違うが、弟子Aに勇者が同意する。

「手を……出すですって!?! まあ、勇者ともあろう人が、魔王とキャッキャウフフな展開……ありかもしれないですわね」

「勇者様……」

女神は何かを期待するかのようニヤリとしつつ、弟子Aは、身の危険を感じたかのようにそれぞれ勇者を見つめる。

「悪いが、いや悪くないが、そういった趣味は断じてないぞ!」

勇者が、冷や汗をかきながらそう告げる様は、これ以上関わるのは危険、と判断しているようだった。

「ぐすん、せめて我が殴られた事についても突っ込んで欲しいです………はい」

なぜか分離している魔王が、女神の登場時に、女神のグーパンチで数十m吹っ飛ばされながら自爆されてやられたヤ○チャポーズで倒れていた。

「………魔王がこんな扱いだと、私としては、このまま出番がない方がいいんじゃないか?」

勇者もこのノリに付いて行けるかどうか不安一杯だった。

「さあ。物語は既にクライマックス! ノンストップハイパーアクション、バトルラブコメストーリー! 女神の微笑みは世界を救う!!
! こう期待♪」

「うええ、まだ始まったばかりだし、何あっさり変なタイト……ルじゃないです、素晴らしいです。ボク見たいなあ」

弟子Aは恐怖で震え……げふんげふん……女神の笑顔、言葉に感銘を受け、感動に涙し震え、素晴らしいと思うのであった。

「本当にいいのかこれで……?」

そんな様子を見て、一人疑問に思う勇者であった。

此度？年？月？日

女神が、色々と準備を始めた頃

タイトルが変わるまでのタイムリミット・・・？？？

番外編：弟子Aの出番はぼなし（後書き）

ここまでお読み下さり、ありがとうございました。

第10話：弟子Aの港町での昼の出来事

この物語は！

魔王を討伐するためにある国が勇者を選定し、その勇者に世界の命運を託し切磋琢磨し苦難に満ちながらも仲間達と協力し魔王を退治する勇者を探す事を辞め、魔王を居城まで運ぶ話だ！

宿屋から出ると、海の匂いがする。

「ああ、港町って感じる！んー、潮風だ」

弟子Aとしても、ここまで活気ある町はウトキテ国の首都以来であつた。

「意外にでかいなあ……よし、とりあえず新しい服買おつと」

大通りには、さすがにボロ雑巾の様な弟子Aと同じような格好をしている人は一人もいなかった。

「（いや、ボロ雑巾は言いすぎでしょ……）」

ぼそりと心の中で呟く。汚れてたりはあるものの、普通だ。全裸な人など一人もいない。漁師っぽい人が、半裸だったりもしたが、それはまだ許容範囲内だろう。

弟子Aから見ても、興味が惹かれるものが幾つもある。通りの脇には、美味しい匂いがする屋台やら、地面にそのまま布を敷いて、その上に商品を置いてあったりするのだ。ぱっと見るだけでも、魔力が籠ってるような掘り出し物のアクセサリーから、見た目だけは高級そうな物、手作りだろう商品などなど。紹介しきれないぐらい所狭しと、それぞれ場所を取り、商品売っており中々の賑わいだつた。

そして、大通りから外れた路地に目的の一つだった防具屋を見つ
ける。屋というだけあって、店を構えてあったのである。

「……いらっしやいって子供？」

ドアを開けての第一声がこれであった。

何とか自制する。中に置いてある防具を軽く値踏みしつつ奥へと
歩を進めながら、自身の中に記憶する防具カタログを閲覧する。博
識とまでは行かないものの、偉大なる預言者にして天才魔導師の元、
勉強に励んでいた弟子Aは対魔術装備など、武器というものには、
結構な知識があった。

「（己を知り、相手の防具を知れば何とやら……まあ、全裸だった
のに疑問も抱かずに居たから、己すら知らなかったんだけどね……）」

自己嫌悪しながら、無造作に棚の上に置かれていた一つの品に目
が行き、近づく。

「おいおい、ボウヤ。商品に勝手に手を触れないでくれよ？ お父
さん、お母さんはどうしたのかね？」

「……ボクは、客です」

少し機嫌が悪そうにそう告げる。こういう地で子供っぽい所があ
るので、子供だと思われても仕方ないのである。

「ほっほー。そうかそうか。しかしなあ、客といってもまだ十を数
えただろうばかりの子には、危なっかしくて売れんのだよ。諦めて
帰んな」

——沈黙が流れる。

「…………いや、ボク十八歳ですから……………問題ないですよね」

「じゅーはちい？」

怪訝そうな顔でじつと弟子Aを見る。

「そんなに見つめられたら…………ボク」

弟子Aは、すぐ笑顔だ。左手の魔王は、この時あえて発言はしなかった。巻き込まれなくなかったからである。

それでもじいーっと、最初に防具を値踏みしていた弟子Aと同じく、防具屋の主人が値踏みする。

「（こんな子が、十八…………信じられん。あんなちっこいのに…………もしや、この子は！ 親を魔物に殺され孤児になり、孤独に一人で旅を続けており、その魔物を倒すためだけに復讐を誓い生きているのでは…………！ そして武器を手に入れるために、年齢を偽り、誰にも頼れずに生きているのでは！？）」

防具屋のおじさんは、想像に富んでいたのであった。

ちなみに、現時点での主人公にして偉大なる預言者にして天才魔導師の弟子Aは、ちっこかった。可哀想な位にちっこかった！

身長に直せば150cm…………は、超えているというのは弟子A談。更に言えば、まだまだ成長途中である！ というのも弟子A談。

旅に出る前は、毎日牛乳を摂取していたという。今朝も、バイキングを良い事に、きちんと牛乳を三杯ほど飲んでいたのであった。

「おじさんの事を…………」

なんか目がうるうるして来て、プルプル震えている弟子A。そして、防具屋のおじさんの妄想も更に加速していく。

「（そして、目的のためには、手段を選ばず、色んな悪行に手を染めているっ！ そういえば、窃盗団がこの街に居たな…………ま、まさかあ！？ この子は、その窃盗団に加担しているのではないか。い

いや、そうに違いない。絶対に手を引かせねば、これは人間として、そして大人として、何よりワシも昔、冒険者という身なりだったからな。絶対に手を引かせねば！」

「ぶん殴りたくなるから、やめて下さいね」

かなり引きつった笑顔で出来るだけ優しく伝える。目じりには涙も滲んでいた。弟子Aとしても泣きたくなるほどに、小さい小さいと言われるのは嬉しい事じゃなかった。

「あ……ああ、悪かった。ゆっくりと見ていってくれ（ああ、可哀想に。これほどまで人を拒絶してしまう環境にあらうとは、そして目尻に涙……人と関わりたいのに、関われない。そんな気持ちが伝わってくるようだ。これでは、ただ言っただけ聞かせる事も出来ないのではないか。むう、なんと……なんとワシは無力なのだ。神よ。彼を救いたまえ）」

神に祈りを捧げるが、それが聞き届けられるかどうかは微妙だろう。防具屋の主人は、心の中でも実際にも、弟子Aの事を思い涙を流していたという……。

「（これは、少し大人げなかったかも……）」

防具屋の主人が泣いているのを、自分がやってしまったと少し罪悪感が生まれる。実際の所、弟子Aが原因で泣いているので、全てが間違いではないのだが、勘違いではあった。

しかしながら、やってしまったものは仕方ないと整理をし、改めて目的のものを見る。

「これは……すみません。この服幾らですか？」

「おお、なかなか目の付け所がいいね。ボウ……お客さん。（この子は、一人で生き抜くために頑張ってきたんだ。ボウやなんて言ったらさっきのように、拒絶しかねん。出来るだけ優しくしてやら

ないと……そして出来れば、窃盗団から……」

今、弟子Aが見ている服は、棚の上に畳まれずに無造作に置かれていた服であった。しかし、これは今朝入荷し、そのまま置きっぱなしになっていたものだった。だが、その服は実の所、かなり良い品である。

「値段だったね。少し待ってくれよ」

主人は、カウンターから出ると、その服を両手に持って弟子Aにサイズが合うか確かめる。

「むう……（ぶかぶかになってしまいか。しかし、このボウヤ……何とも、使い込まれた布の服だ。じっくり見ると、何かするどい物で破られたりした後まである……ま、まさか！ この子は、窃盗団という誰かに迷惑する行為に嫌気が差し、抜け出そうとしてひどい目に合いながらも、服装だけでも変えてこの町から脱出しようとしているのでは！？）」

「（こ……ここの主人は、ころころ表情が変わるなあ……）」

困ったように、弟子Aは防具屋の主人を見る。泣きそうな顔になったと思ったら驚きの顔、そして怒りを込めたような表情をしたと思ったたらまた泣きそうになる……実に多彩であった。

更に、困った事に弟子Aに服を測るかのように、手に持った服を押し合えてたままの状態である。とりあえず、目を背ける事にした。

「ううっ……」

感極まったのか、なぜか泣き出す主人。

「えっ、あの……大丈夫ですか？」

弟子Aが、少し横目で見たら、泣き出しているのである。最近、魔王に慣れているせいか、いい大人の泣き顔を見て、びっくりはしたものの、それほど何ともないのである。出来れば、弟子Aとしては女性の方がよかったかなとか、ちょっぴり思っていたりもした。

「いや、オモッテナイヨ？　——んんっ！　いや、なんでもないです。って大丈夫ですか？」

「あ、ああ……すまんすまん。目に塵が入ってな、ははは……。なんという根は、心優しき少年だ。その病んだ心にも……否、これは全て魔物……強いては魔王が悪いのだ！　全ての魔物の根源。魔王のせいだ！　ああ、こんな純真なボウヤの運命を、性格をここまで狂わしてしまうとは……」

再び、涙が流れてきそうになるも、踏みとどまった。弟子A……もといボウヤは、心配して主人を見ていたためである。盛大な勘違いは、涙と違い留まる事を知らずにいたのだが。

「それはそうと、少しこの服は大きすぎるみたいだな。どうしても、これがいいのかい？」

「あー……いえ、そんな事はないんですけど、ボク重い物装備できなくて」

事実弟子Aは、サイズ関係はともかく力のパラメータが低い事もあり、重いのは無理なのである。体力がまったくもって持たないためだ。

「それに、この服は魔力で強化されてますよね？」

魔力が籠っている品というのは、傍から見てもどこか目を惹く物になる。それは、見た目、用途が何であれ、力という物が込められているのだ。魔力を持たない人であっても、無意識下で目を追ってしまう場合もある。特に、この服……ローブと形容して問題ないだろうソレは、見た目も相まって良く出来ている物だった。

「ほお、分かるのかね？」

「ええ、そういう類の物には、興味がありました」

嘘ではない。興味も確かにあったのだ。

「なかなか目利きだね。これは、西の大陸から輸入してきた銀霊のローブと言って、こっちの大陸じゃ物珍しいからね」

「へえ、銀の素材に精霊の加護まで付いてるのかぁ……」

思った以上に上質な素材であった。それを今朝仕入れたばかりとはいえ、放置はどうなのだろうか。

「……ふむ。これ一着で、1500Gもの大金だ。持ち合わせはどうかね？」

「たかっ!？」

「そりゃ、輸入代やらもろもろね。あくまで目玉商品だ。これを見ると、客引きにも使えるからそれに見合った値段になってるんだよ」

弟子Aは、ここに来て悩んだ。ギリギリではあるが、買える範囲である。宿屋代は昨日支払っ「その様子だと……よし、少し待っていろ」

それだけ弟子Aに伝ええると、主人は手に持っていたローブを最初に置いてあった場所ではなく、本来置く場所であっただろう目立つ場所へと戻すと、急いで奥の部屋へと姿を消していった。

待つこと数分、その時、この店に一人の来客があった。

「っ!」

扉が開かれると、入ってきた人物は、弟子Aを見つけてすぐに、その店を後にした。

「ん？」

その間、広くはない店の中にある商品を見て回っていた弟子Aが振り向いた時には、扉は開いたままで誰も居ない状態だった。

「……?」



更に数分を要して、防具屋の主人が新たに、灰色のローブを持ってきたのであった。

「……それで、お客さん。よかったらこっちのはどうかかな？」

「え？　これは？」

防具屋の主人の方に向き直すと、手にはさきほどのローブには勝るとも劣らない、強い魔力が込められていたように思われる品だった。防具屋の主人から許可をもらい、勧めて来たローブに手を触れる。何とも心地良い手触りが弟子Aに伝わる。

「なかなか良い品そうですね。でも、さっきのと比べても素材やら魔力やら……どちらかというところの方が良さそうかな？」

「ああ、銀霊のローブと同じで、一品物だから少しだけ値は張るよ。名前はカラミティローブっていうのさ、さっきのローブよりは安い。……そうだな480Gぐらいでどうかな？」

「買う！」

値段を聞いて即決断。目利きには自信があり、その値段で、カラミティローブが手に入るのなら正直言ってお買い得すぎると判断したのだ。

店主と二人でカウンターまで移動する。財布を取り出し、お金をカウンターのうへと置き支払いを済ませると、さっそく試着室へと移動する。

『おい、人間』

『んゝ、なーにー？』

もぞもぞと布切れという名の元布の服を脱ぐと、細い体が露になる。数少ないサービスシーンである。

『やめておけ』

『えゝなんでさ?』

『そのローブを着るのはやめておけ』

『むゝ……理由は?』

『嫌な感じがする』

元布の服を脇に置くと、さきほど買ったカラミティローブを見る。

「(……嫌な感じ? 呪われた品な訳でもないしなあ。それにお店のお勧めだし大丈夫なはず)」

弟子Aの中で結論付け、左手の魔王の世迷言と切り捨てる。上から被りながら、ローブを着る。腕、頭を通し終えて完了。フードまで完備してあるので、雨になっても安心設計だ。

『……我は警告はしたからな』

それ以降、再び静かになる魔王であった。

元布の服を鞆に入れ、試着室から、弟子Aが姿を現わす。ボロボロだった元布の服に比べれば、雲泥の差とまではいかないものの、最低限の人間としての服装の水準が保たれるレベルまでは、回復したのではなからうか。弟子A自身、このローブの着心地はよかった。サイズとしては、少し大きかったが、肌触りがくすぐったいと思いつつも満足いくレベルであった。

「なかなか、似合ってるじゃないか」

防具屋の主人が声をかける。

「ややや、そんなことないよー」

満更でもなさそうな反応をする弟子A、褒められると表情に出やすかった。

そして、再び防具屋に入ってくる人物が居た。

「やっとなるー？」

と聞きながら既に店の中に、入ってくる辺りに発言の主の性格が窺い知れるかのようだ。

「ん、いらっしやいませ」

防具屋の主人が対応する。それにつられて、弟子Aもそっちの方を向くとそこに立っていたのは、弟子Aより背の高い女性が立っていた。見た目では、弟子Aよりも年上に見えるだろう。

つばが大きい魔女が付ける様な紅い帽子。着ているローブも真っ赤である。肩まで伸びた黒髪と全てを射抜くかのような紅い二つの瞳が何だか印象的だった。

奥へと来ると、弟子Aが最初に目を付けたローブの前で止まる。

「これやこれ。しかし、東の大陸に送られて来てるとは、難儀やったわあ」

「（この言葉遣い……西の大陸の人かな）」

物珍しそうに、弟子Aが視線を送っていると、不意に目が合い思わず逸らしてしまう。

「なんや〜？ 私が気になるん？ ん、お子ちゃま！ 可愛いなあ。それに、なかなか面白いもん着てるやないの。どこで見つけたん？ 身長幾つやの。ちっちゃいなー！ でも、それが可愛いんやけどね。私は、西の大陸から来たんや。言葉遣いで分かってしまうわな！ はは、オモロイやっちなー」

ローブを見るのをやめると、弟子Aに近づき頭をぐりぐりしつつ、背中を叩いてきたりと、色々と一度に言ってくるため、少し事態を把握するのに困惑した。

「なんやなんや。元気ないなー。……あー！ そりゃそうやな。そないなけつたいで、面白いもん身に付けて、宿してたらそ

ないな気分にもなるってもんや」

嬉しそうに、物珍しそうに、途中で驚き、そして楽しそうに言葉を止めるという事を知らないように、言葉が弟子Aに撃ち込まれ続けていく。その中に重要な一言を混ぜながら。

「あ、いや、その！ え？ 色々ちよつと待ってよ！」

「あーあー、ごめん、ごめんや。こういうのが性分なんや、許してな？ しゅーじーん！ この服下さいな♪ 先これ買っておかな、すぐ売れてまうやろし。はい、2000G即決や！」

「あれ、そのローブ確か1500Gですよ」

「ややなー。私をみくびらんといてーな！ これでもこの真の価値知ってれば、安いぐらいやからな。少しやけど、色付けさせてもらたわ」

「え、あ、ああ、毎度あり」

さすがの防具屋の主人のスキル、妄想暴走【ファンタジーカーニバル】が発動する暇さえなく、例の防具が買われていくのであった。防具屋としても、値段設定以上に買われる事も、それがより良い品と言われて持っていかれるのであったので、文句は一切なかったのである。

「さて、そこのお子ちゃま！ 私の買い物はこれで終わりや！ ちよつと試着室借りるんよ？ あ、覗いちゃあかんよ！？ 子供やからって、そういうのはお姉さん許さへんで？ 絶対やで！」

何か急に恥ずかしそうに、そう告げる。弟子Aからみても、かなり疲れる人だという印象とともに、自身に対して向けられた言葉に悪意がない事を感じているからか、怒ろうという気持ちは浮かばなかった。ただ、気付いてなかったただけかもしれないが。

「……嵐が過ぎ去った」

「う、うむ……」

二人共、どうにも反応し切れなかったが、少しの間ほっと一息付

く。この間にも弟子Aは、もう一方の目的である情報収集を行う事にした。

「あー、そういえば街道にゴーストが出るとか、変わった噂聞いたことがあります?」

魔王の城どこですかと、聞きたいところだったが、さすがに弟子Aもそれは危うい質問だと認識していた。

「街道に? いや、そんな話はここ最近所か、聞いたことないな。出てりゃーワシの耳にも入るだろうしな。でもな、変わった噂なら幾つか知ってるぞ」

「変わったですか?」

「ああ、首都周辺の街道で爆発が起こったやら、魔王が復活したから勇者を探している人がいるのかな」

「ば……爆発……」

「ああ、何日か前になって聞いたな。その時は、何か城の方が忙しくて警備も離れられない状況だったらしいなあ」

さすがに、弟子Aも気付かれてないとは思ってはなかったからその事についてはよかったのだが、城の一件は少し気になっていた。

「城で何かあったのかな……」

問う訳ではなかったのだが、口に出してしまっていた。

「ん、ワシは詳しい事は知らないが、勇者を探している人に協力をっていうお触れを各国へ通達するためだったとか何とか、だからこうして、勇者探しが噂になってるのかもしれないがな」

「(うつ、もう広まってるの!?! 正体がいきなりバレそう……でも、この左手の事さえばれなきゃ……)」

弟子Aとしては、思ってもみなかったがここまで情報の浸透が噂レベルでも早いとなると、これは弟子Aとしては、あまり好ましく

ない状況でもあった。

「し……しかし、魔王が復活しただなんて物騒ですね。コワイデスネー。この近くに魔王の城なんてありませんよね？」

背に腹は変えられないので、いきなり核心を突いてみた。

「魔王の……城？（ま、まさかー！？ このボウヤ。復活したとか言う魔王の城に乗り込む気じゃ……それで自身の復讐や、全ての決着を着けるつもりか。しかし、このボウヤが、噂の探している勇者では………）」

見当違いもここまで行くと、賞賛したくなる。

「心当たりが？」

弟子Aに抱かれている思いなど露知らず、何か心当たりがあるような、呟くようにその言葉をかみ締めていたので尋ねてみる。

「あ、いや……ワシに心当たりはないのだよ。だが、もしかしたら、その勇者を探している人なら知ってるんじゃないか？（そう、このボウヤと探している方を巡り合わせるのが、ワシの役目……！）」

「（……目の前に居る人が、その当人なだけだね）」

ため息を噛み締め、何とか心の中だけでする。

「仮に知らなかったとしたら、王室の人が調べてるんじゃないかね。勇者が居ても、魔王の居場所が分からなければ意味がないしな（きつと、勇者探ししているお方が、このボウヤを導いてくれるはずなのだ）」

最もな事を、ほとんど関係ない人に指摘され、冷や汗を浮かべてしまう弟子A。

「ですよね……ははは」

乾いた笑いしか出てこなかった。急げば一日で戻れるだろうが、この状態で国へ戻るのは自殺行為にも等しい。魔物と同様に処理される恐れもある。もう一つ付け加えれば、あくまで現在は主人公だが、主役というかヒーローはあくまで勇者。一般的に左手が魔王な

人間では、信用度は薄いのである。それが、既に英雄とまで呼ばれていた師匠ならともかく、その他大勢の中から、少し突出している弟子Aでの信用度、信頼度では到底支持を得るのは難しかった。

「変な事聞いてすみません、それじゃボクは他にも買いたい物があるのもこれで……。この服、ありがとうございます。大事に使いますね」

「いいや、気にせんでいいさ。それは、気に入った人に渡すといいつて売ってきた人が言ってた品だ。わしはお前さんが気に入ったんだ。存分に使ってやってくれ」

「はい、では」

「ちよーっつと、まちーっなあー！」

試着室から、さっきの女性が出てくる。着替えは済んだようで、服装がさっきとは違い銀霊のローブを身に着けていた。

「私は、なんていった？ 私の買い物は終わったって、お子ちゃま！ アンタに言うたんや。何で見ず知らずのアンタに言うたんか分かる？ 待ってて欲しいからや。それすら分からん言うんやったら、アンタは真正正銘、お子ちゃまや！ 女心が分からんから、彼女いない暦、イコール、年齢なんやで！？」

「え、ええええええ！？ ……ぐはっ」

言葉を発するたびにどんどんと、弟子Aとの距離を詰めてくる。襟首を掴んで、持ち上げられる……。という事にはならなかったが、再度、言葉の乱れ撃ちを喰らうハメになる弟子A。突然そう言われなくても、という気分にもなったが、それが口から出るような状態でもなかった。そして、最後の一撃は、見事に弟子Aに精神を貫く。地面が揺らいだかのように、身体を支える両脚が揺らぐも、ギリギリな所で踏みとどまる。

「まあ、ええ。ほな、アンタもここから出て行くみたいやしな。ちよっと話があんねん。さっきの……そうやね」

女性はそこで、止めると弟子Aの耳元で囁くように告げた。そして女性の視線は、布が巻かれていた左手を向いていたのだった。

「魔王について……なんてどうや？」

その言葉で、心臓が口から飛び出してしまうような衝撃が襲う。耳にはこそばゆい感覚もあったが、弟子Aは、それを意識する気にならなかった。

「……分かりました」

了承する。しかし、女性を見る目が、魔導師としての目となる。そして、その目で見てようやく分かる。この女性は、相当に格が高い魔導師であると。

『この人間……我が見えているのか』

弟子Aに聴こえる事は、魔王にも伝わっていた。魔王自身、別に気付かれた所で全てを無に返すのみ。と、本来ならば簡単だったが、今はまだ回復中。魔力の方は順調に戻ってきているも、総合的に見ても十分の一度度にも、及ばないほどにまだまだであった。そういう事情もあり、魔王としても悟られるのは、好ましくない事態だった。

『分からない、けど……今は素直に従うよ』

『良きに計らえ、と我は告げたはずだ』

『……了解です。マオウサマ』

何だか、魔王が面倒ごと丸投げのように思え、少しだけ嫌味っぽく念を送る弟子A。魔王からは特に何も反論は出てこなかった。布の中の様子は見えないが、きっと何か考えているんだろうと弟子Aは結論付けていた。

「よっしゃ、じゃあウチが宿を取ってる部屋までいこか。反論はな

しやで？ それじゃ出発やー！」

一人楽しそうにしていたが、弟子Aは、とてもとてもそんなノリにはなれなかった。しかし、大人しく付いていくしか、選択肢として思いつかなかったのである。

この選択が、今後どうなるかは弟子A自身、左手の魔王すらも分からなかった……。

此度125年8月19日

午前11時前の頃であった。

世界が闇に覆われるまでのタイムリミット…十二日には変わらず。

第10話：弟子Aの港町での昼の出来事（後書き）

弟子A現在の装備

武器…なし

防具…ボロボロに破れた布の服？↓カラミティローブ

左手…布に巻かれた魔王（布は脱着可）

所持金…1540G↓1060G

所持アイテム

ボロボロに破れた布の服？

幾つかの薬草

高級食器一式

ここまでお読み下さりありがとうございました。

第11話：弟子Aの港町での昼の出来事2

この物語は！

魔王を討伐するためにある国が勇者を選定し、その勇者に世界の命運を託し切磋琢磨し苦難に満ちながらも仲間達と協力し魔王を退治する勇者を探す事を辞め、魔王を居城まで運ぶ話だ！

「さて、入ってええで」

「……邪魔します」

入室許可が出たのは、扉の前に着いてから一時間経ってからだった。ここまで、特に会話らしい会話もなくついに行き、到着まではかなり早かったのだが、一体一時間も何をしていたのか、疑問は尽きなかったものの、あの一言の真意を確かめるためにも、待つ以外には許されなかったのだ。

だが、入って弟子Aの持った感想は……。

「なななな……一体何が！？」 部屋で戦闘でもあったの！？」 ええ

ええ！？」 何だこりゃー！」

まるで泥棒にでも入られて、荷物やら何やらが荒らされたかのような惨状……ただし、控えめに言っただが。正直に言えばこうであった。

「どうして！ ええええ！？」 どうして！？」 ボク宿屋に来て、扉を

開けて入ったと思ったら、魔境だった……！！」

そう、魔境、魔窟、魔界、阿鼻叫喚、ああ、この世にこんな場所があるだなんて誰が予想しただろうか、という惨状であった。

「……お子ちゃま。辞世の句は、それでいいんやな」

素晴らしい笑顔、きつと女神が居るとするならば、それすら凌駕する笑顔だったのだろう。そして、優しい声色。言葉の内容とは裏腹に、全てを包み込み、その罪を許すかのような素晴らしい優しい声。でも、許す訳もなかったのだが……。

「あわわ……」

ぶるぶると震える弟子A。怯えて声も出ない。次に弟子A自身がこの魔境の一部になるのは目に見えているのだ。短い人生を閉じるには、何とも寂しい場所であろうか。

「ふふふ……。おねえさんなあ。優しいねん。優しすぎるからな……痛くない。痛くせえへん。優しいやろお……ふふ、ふふふふふ」
黒髪の間から、見える目は、完全に虚ろで据わっている。

『ふむ、ピンチだな。貴様も相当にひどい人間だと思っていたが、目の前に居る人間は、人間を超えているわ』

『ななななな、何にに、れれ冷静に、いつてるんだよおおー！？』

『これで何度目だ？ 念話で、怒鳴るな。まあ、いざとなれば分離するだけだからな。さて、とりあえず、貴様にひどい目を合わされてから学んだ事を一つ教えてやろう』

弟子Aとしては、この状況が突破できるのならば、例え魔王であっても、悪魔の取引をして生き残りたかった。生きてるって素晴らしいネ。

『は、ははは早くうー！ー！』

目の前の、赤い魔導師……紅い魔女は、ゆらゆらと揺れるように、それでもしっかりと、じわじわと……弟子Aとの距離を詰めていった。

『ヘルプみいー！』

『ククッ、貴様のその慌て顔、見てて心洗われるな。……簡単だ。慣れればいいのだ』

『役立たずううう!』

『なにを!? 我を役立たずとは、心外な!』

「ううう……ごめんなさーい!」

しかし、弟子Aには、言われるまでもなく唯一の対抗手段にして、最終手段。謝罪しなかったのだ。

そして、1秒の思考もなく即断し……まさかの土下座、軽やかなジャンピング土下座。地面に頭を擦り付け、誠心誠意の土下座だ。

「ぐおおうおう! まっ!」

どこからか声がするも、弟子Aの耳には入らず、怯えたまま土下座の体勢を維持し続けた。

「おいっ!? 痛いのだ! 待て待て! 我まで地面に押しッ!」

「ん……今の声。左手からやな……」

意識を今取り戻したかのように、赤い魔女が改めて弟子Aをちゃんと視認する。

「って、何で土下座なんかしとるんや。ほらほら、顔あげーや。これぐらいで本気で怒るわけないやんかー」

「うううう……（ほ、本気だ。絶対本気だった）」

何とか涙を拭き、立ち上がる。土下座の判断は、間違ってたと思いはっと一息つく。

『ぎざまあ……!』

『もう、魔王! 何で声を出すのさ!』

『なっ、我は』

「ほらほら、二人……いんや、一人と一匹? まあ、今の所手出し

はせーへんから、中に入りーや。歓迎するで。ちよっと、時間なかったから散らかしっぱなしで、恥ずかしいんやけどな」

はにかむ様な、笑顔は素晴らしく魅力的だった。だけど、弟子Aは何も突っ込めない。否、命が欲しいから突っ込まなかったのだ。

本来ならば、一時間かけての整理は、逆に散らかしたのか、それとも整理してあのレベルにまで何とかなったのかを尋ねる所だったが、その質問を実行に移さなかった弟子Aには、想像しか出来なかった。

「……はい、失礼します」

『おい、貴様。我への謝罪がまだだぞ』

『ぐう……ごーめーん！ これでいいでしょ、少し静かにしてて！』

『む……むむむむ！』

不機嫌そうに、魔王へ言い放ち弟子Aは、紅い魔女の後に続いた。そして、部屋に入った段階で勝手に扉が閉まる。

「っ……」

「お子ちゃま、あんたも魔導師や。これぐらい出来るやろ？ さ、椅子に座りーや。ゆっくりお話したいしなあ？」

紅い魔女が反対側の椅子に座ると、テーブルの上に置きっぱなしになっていた色々な物を、床へとどかして行く。その様子を見つつ、弟子Aは促されて、素直に椅子へと着く。

「……それで、さっきの話なんですけど、魔王について何か知ってるのですよね？」

警戒心をむき出しにする。警戒が増したからか口調が変わる。

「ふふ、気になるー？ でもな、質問はこっちからが先や。その左手……なんや？ 面白い魔力放ってるやろ。その布ボロボロやから、隠そうとしても、魔力の遮断効果消えちゃってるやん。甘いなあ」
元々布の服なので、そんな特殊な効果はなかった。一方的な勘違いではあったが、何かある事は看破されていた。

「え、いや。これ布の服だからそんな効果ないですよ？」

弟子Aもまた、少し的はずれた返答をしていた。

「……隠すつもりって視覚的にしかなかったんかいな。まあええわ。で、その左手見せてもらってええかな？ 隠すつもりやったら、そやね。強制的に見せてもらうだけやけど」

呆れたと言わんばかりの視線を弟子Aに向けて、左手の強制開示を求めてきた。弟子Aとしては、さきほどの事もあり、首を縦に振ることしか出来なかった。

大人しく、左手の布を解いたそれを見て、紅い魔女は声には出さなかったものの、目を見開き驚きを隠せなかった。

「……これ、お子ちゃま。いや、あんた何もんや。いや、おかしい。ありえへん。なあ、その魔物……あんたや。何者や……？」

「クククッ、我を見ても尚、問答を求めるか、人間。かつての勇者もそうであったが、なかなか面白いな。さて、だ。貴様の質問に順に答えてやろう。……我は魔王だ」

言った。言わせてしまったのだ。弟子Aは、苦痛の顔を浮かべている。どうせばれるのならば、もっと上手い方法はなかったものかとも思ったが、今の弟子Aに手段はなかったのだ。

「ほんまに魔王なん……か？」

紅い魔女もまた、魔王が復活した。勇者を探している。等々、そういうった情報は知ってはいたものの、勇者はともかく、魔王の方は半信半疑であったのだ。しかし、目の前にいる弟子Aの左手が魔王と名乗ったのには、相手の正気、そして自分の目と耳を疑った。

「ボクとしては、やだけど、魔王みたいだよ。少なくとも、それに相応しい力は持ってた」

「クククッ、我が同胞もようやく認めたか。さて、人間どうする？ 我を害するか？ 我は魔王……そう、魔王ガ「あはははは、ふふっふ、あかんっ、ほんつま、オモロイなあ！ おもろすぎるって、

「はは」

「おい、貴様……」

温度が下がる。弟子Aにも分かった。最初に出会った頃の魔王に近しい気配。そう、殺気であった。部屋は、その空気に吞まれたかのように、静かに……は、ならなかった。

「あかんって、それ魔王？　魔王なん？　そんなムツキムキな身体して、もう見た時から、ギャグやと思ったけど、どこで突っ込むんかと思ってたら、最初からボケ倒しなんて……」

紅い魔女は、沸点がととても低かった。主に笑い方面にだが。左手の魔王も、白けてしまったのか、殺気が嘘のように消えてしまい、大きなため息をつき黙ってしまっていた。

笑いが収まるのに、数分経って、ようやく静かになる部屋。

「はあ……はあ……ふうー。あー、ごめんや、ごめんやで？　私も、

こんなに笑ったん久々や」

目尻に涙が浮かぶほどに笑い疲れた様子で、涙をぬぐいながら、謝っていた。

「さーて、そうやな。魔王か。正直、信じるかどうかで言えば、信じられへんな。でも、高位の魔物……んー、上から数えて早いぐらのやばい奴やってのは、殺気で分かったわ。で、事情を話してもらってもいいかな。私もな、変な呪い掛かった奴に知り合いがおるねん。だから、あんたの力になれるかもしれへん」

雰囲気も真剣なものに変わっていた。笑っている最中も隙なんてものは、なかった。と弟子Aは思っていたものの、実際にどうかまではわかっていなかった。

どうするかを悩んだが、今の所少なくとも好意的……かは、微妙だったものの、話しても悪くならない方に賭け、思い切って弟子Aが知る限りの内容を話してみた。



「世界が滅びる……か。で、そのキーが、その自称魔王」

「我は歴とした魔王だ！」

「……です」

「お子……んー、ウトキテ国の使者様は、それを信じるので？」

魔王の発言は軽く流される。

「信じて……うん、ボクはそうだと思ってる。ボク以外にも勇者探しは、さすがに多分してるだろうし。これ……魔王を野放しにするのも危険って思うんだ。あ、後、使者様だなんて、照れるんでいつもどおりで」

「ククッ、魔王たる我を、これ呼ばわりとは……な。言ってくれる」
説明している最中に、魔王が自嘲気味に呟く。しかし、悲しいかな、誰も反応はしてくれなかった。

「そやな。そうさせてもらうわ。んー、難しい所やな。でも、こないな話を聞かされて、聞かへんかった事にするわけにもいかへんな。そんな状態で、国とかに話しても、正気を疑われるだけで、頼りになるわけがあらへん。逆に捕まるかもしれないな。国家、国、権力者は体面ばかりしか気にせーへん。手遅れになってから……やっとな、気付くんや」

バツサリとそう言い切る紅い魔女。どこか哀しそうな顔をしていた。

「……話が逸れてもうたな。さて、私が知ってる情報なんやけど……」

世界を救うための光明を、やっと手に入れられるという期待感を胸に秘めながら、弟子Aはただ黙って紅い魔女の言葉を待つ。

「……うーんと、その……な？」

期待感を胸に秘めながら、弟子Aは待つ。

「……ほら、な？ 分かるやろ？ もう、察してるやろ？」

弟子Aは！ 期待を胸に秘め！ 紅い魔女様を、怪訝な表情で見つめる。その目は半眼だった。

「まー、うん。違うねん、そないな顔せんといてーな。な、な？」

弟子Aはだいたい先が読めたが、選択肢で言う所の、相手の言葉を待ちますか？ という問いで、はいを連打しているような状況であった。例えソレが無限ループであったとしても、誰もが通る道、何かあるんじゃないかと選んでしまうそれは、性。人間である限り無意味と知っていても、やってしまう事なのである。弟子Aもまた、その一人の人間であったのだ。

「もう、分かった！ 分かったから！ ごめんや、ごめんってば！ うちがわるーございました。てきとーや。ブラフや。嘘っぱち、勘や勘！ あんたが、魔王について何か知れたそうやったから、カマかけたら、ほんまびっくりするぐらいに当たりで、ここまであっさり、全部話してくれるとは思ってもみーひんかったんやて……」
無限ループかと思われた選択肢も限りがあるパターンもあったのだ。とはいえ、それを証明しなかった訳でもなく、むしろ、弟子Aとしては、そうであって欲しくなかった。

「薄々、分かったよ……」

露骨にため息を付く弟子A。これ以上は、目の前で両手を合わせて謝っている人に対して、更に黙っているを選択することは、弟子

Aの人並みにある良心の呵責に引っかけたのである。

「……いやらしいなあ。分かってたんなら、ちゃちゃっと突っ込む
んが芸人やで？ お子ちゃまも人が悪いわ。でもな、うち……私が、
西の大陸で仕事してた時に、魔王についての情報が残ってる場所は
知っとる」

「そんな場所が、ほんとにあるの？」

いつの間にか、弟子Aは素の言葉遣いになってる事も忘れて、質問をしていた。

「冗談は言うけど、嘘はあんまつかへん。それに、空気ぐらいも読めるしな。んで、その場所なんやけど、西の王国の城内にある重要文献ばっか集めとる図書館や」

「あー……聞いたことあるある！ 師匠も、昔面白い本がいっぱいあって、面白いつて言ってたなあ」

「知ってるて！？ 面白い本って！？ あそこにあるのは、本気で秘匿すべきもんばかりやで？ 存在を知ってるのはともかく、見れる人なんて極々一部……というか、何者やねんあんたの師匠って……。って、あかんあかん。それについては、また今度詳しく聞かせてもらう。話がまた逸れてしまうしな。で、確かそこに、魔王についての本もぎょーさんあったはずや。言うても、東西の大陸に出回ってるやろう魔王関連の資料、文献と比較してやけどね」

「そこで資料を閲覧できれば、魔王の居城についても載ってる可能性が高いと……」

「そのとーりや」

腕を組み、うんうんと頷き。すごいやろーという風な、したり顔をして弟子Aを見つめる。

「ククッ、私の資料か。それはそれで興味深いな。一国がわざわざ秘匿しているというからには、より真実が書かれているのだろう。主に我との敗北を重ねた戦いばかりがな……」

魔王は魔王で、自分が書物に記録されているという事実は、興味深くあった。人間から見た魔王という視点。正直に言って、弟子Aなどは論外中の論外。特殊中の特殊。レアケースだ。魔王を散々馬鹿にして、遊ぶかのような態度は、魔王として甚だ遺憾なのであった。聖なる光【ホーリー】という切り札があればこそそのパワーバランス。完全に弟子Aを手中に収め切れていない魔王にとっては、無意識下で弟子Aを、自身を滅び尽くせる唯一の存在と分かっておりながらも、その感覚を認める訳にも行かず、複雑な心境であった。

「ほんまかいな。私はまだ信じられへんわ。こんな方向音痴で自分の家も分からんような痴呆が、散々人類を苦しめた憎っくき敵やなんてな」

恨めしそうな目で魔王を見る紅い魔女。魔王が現れ、人類は一度、滅亡の危機に晒され、それを回避したとはいえ、今も尚、その手先とされる眷属の魔族、魔物達は健在であり、滅亡とまでは行かないまでも、少なからず恐怖に晒されている地域もあるのだ。

「ぐっ……何と言われようとも、事実は変わらん。本来ならば、貴様のような無礼者は即刻抹殺してる所だ。だが、我への帰り道の手がかりになる情報を鑑みて、今しばらくその命預けておいてやろう」耐性が付いてきているのか、怒りを飲み込んで魔王は、言い放った。

「ふーん？ まあ、殺気だけは超一流やけどなあ、お子ちゃま。その自称魔王にどこらへんまで支配されとるん？」

紅い魔女は、場数も多く踏んでおり殺し殺され、という場は既に何度も経験済みであったが、あんな殺気に晒されるのは二度はごめんと思える程度に内心焦っていた。それでも平静を保って笑えたのは、事実。魔王の姿が笑いの琴線に触れたからであった。

何にしても、聖なる光【ホーリー】についても聞いていたので、それを耐えて尚存在が維持出来てるのだから、もしそれが事実なら、

魔王としての信憑性は高いと認識していた。

「えっ！？ 支配……」

「ぬ……私は既に、こやつのを全てを支配しておるに決まっておるわ！ 我の帰還を妨げないのが、その証拠よ」

冷や汗が、ぶわっと出るも平静を装いつつ、誤魔化そうと魔王は必死であった。実際の所、魔王自身が完全に自由が利く弟子Aの四肢はなかった。左手や弟子Aの身体を動かすという事は、魔力消費を行って初めて出来る行為であり、更に左手以外は、相当に魔力負担が必要だったのだ。

「んー。気絶した時にボクの身体を使つてくと、昨日の戦闘中に体が引つ張られたとかぐらいで、ボクの意識がはつきりしてる時にはそれほど、かな？」

「ふーん、そうかそうか。大したもんや。お子ちゃまの癖に、すごすぎるわ。ま、意識がある内は、完全に乗っ取られる事は、ほぼありえへんってのが分かったわ。自称魔王の言は無視するとして、念のため、精神的な支配対策もしておくとしよか」

「我を目の前に堂々と、そういう話をするのか、普通？」

魔王が疑問を口から普通という言葉が出るという、一見するとおかしいこの状況であったが、その問いに答える者はいなかった。

「え、何かあるの！？ 出来れば、すぐに教えてくれるとボクとしても、かなり嬉しいなあ。そっちに関しては、早く何とかしないとって思っても全然だったし……」

弟子Aも優先的に考えていた事案だったが、どうしても対抗策が出来ていなかった。しかし、その対策も出来るというのであれば、魔王の情報に加え、渡りに船とはこの事であった。

「ま、あくまで保険やけどな。お子ちゃまの椅子の下に置いてある

指輪貸したるから、嵌めておき。それ、精神力を増強する貴重な指輪や。それなりに効果あるはずやで？」

「置いてあ……んんっ。あ、ありがとうございます！　でも、いいの？」

この時、脳裏に浮かんだのは魔境の一部とかした自分。なんせ、置いてある……ではなく、明らかにたまたま椅子の下に散乱してた物が、落ちてあったのだから、置いてあるなどと到底弟子Aとしては思えなかったのだ。だが、命惜しさにその件については、ギリギリで喉の奥へと引っ込めた。

「……なんや、引っかかる所もあるけど、これぐらいはサービスや。私としても、世界を救おうって粹がってるお子ちゃまに、何かしてあげたいしな。まあ、さっきも言うたけど、多分あんた自身の精神力で、対抗してる所あるみたいやしな。乗っ取りとか言うたら、身体、精神丸ごとや。弱ってたかて、自称魔王。一介の魔導師相手に、左手だけで……お笑いにもならへん。普通は……な？」

魔王を見て冷笑を浮かべる紅い魔女に、魔王は不機嫌な感情を隠すことなく、不機嫌な気配を漂わせている。そんな様子も気にかげず、弟子Aは椅子から降りて下に幾つもモノが散乱してる中から、指輪を見つけると、さっそく嵌めてみる。

するとどうだろうか、呪いの音楽が流れる。ただし、魔王にだが。「ク……ククッ、こ……これ……ぐうう……！　これぐらいで！　わわ、我をー！　抑えられれると思ってるのはな！？」

と、苦痛の笑みを浮かべつつ、怒りながら言い放ってくる。どうやら幾分か効果はあったようだったとは弟子Aと紅い魔女の共通認識であった。

「ぐぐぐ……！」

魔王は、苦しみの余りか顔を歪め、痛みに耐えるのが精一杯の様子であった。

「さて、乗っ取りの件は、これにて終了や。それ以上はお子ちゃまの精神力に頑張ってもらうとして……や。西の大陸の国へ行かないといかん」

「です……よね」

椅子に座り直して、再び紅い魔女と対峙。もとい、魔王の居城探しの話し合いへと移る。

「ちょうど良い具合に、航路もある港町だから行くのはともかく、そんな重要な文献を見せてもらえるかだね」

「そやなあ。私かて、必要があった時やったからこそ、見せてもらえたしな。本来ならもっと探りたかったんやけど……残念ながら今の私じゃ、あそこに近寄るのも難しいしなあ」

「そうなの？」

「まあ……ねえ」

歯切れの悪い回答をして、苦笑を浮かべる紅い魔女。弟子Aもそれを見て、最初のように藪の中にいる蛇を突く真似はしなかった。

「……んー、とりあえず向かおう。時間も惜しいしね」

「そーやな。うちの探しもんも、一旦中止してお子ちゃま、あんたの手伝いしたったるわ」

「探し物って、いいの？」

弟子Aの目の前の人……紅い魔女がなぜ、西の大陸の事を知ってるか、なぜ協力してくれるか、何を探しているのか等々、名前すら聞いていないことを今更ながら思い出した。

「んー、そやなあ。んー。……まあ、ええか。じゃあ、一応お子ちゃまにも聞いておくわ。金髪で腰まで髪の毛伸ばしてて、身長はだいたい170ぐらいやったかな。私より少し年上で、何と言うか人が良さそうな感じや。あー、あとな。変な事を何度も何度も、繰り返しばっかりしか言わなくて、もしくは……何もしゃべらへん無口な男や」

「……ふーむ」

弟子Aは、物ではなく、者……人だったかと思い直して、記憶を辿って行く。

「ま、期待はしてへんけどな。さて、準備しよか」

その様子を見て、やっぱりかという諦めの表情を紅い魔女は見せる。落胆の色はなかったものの、最初から期待していなかった様子は、手に取るように弟子Aには分かった。

そしてもう一つ言えば、弟子Aには記憶に新しい人物が一人だけ思い浮かんだ。しかし、紅い魔女の言とは、一部しか該当していなかったのもまた事実であり、言うかどうかを迷っていたのだった。

「んー。その、えーっと」

「……なんやねんな。……歯切れ悪いし、うちの事、期待させんといてーな。お子ちゃまみたいなのに、励まされても嬉しないでー？」
さっきの仕返しとばかりに、同じ事はするなという意思表示なのか、本当に落胆しているのかは弟子Aには、伺い知れなかった。

「あー、その！ 金髪でもなくて、長髪でもなくて、夜だったので人が良さそうなのかまでは、分からなかったけど……同じ言葉ばかり繰り返す人なら、この前センタ村って所で「なにやて！？」」

余りの声の大きさに弟子Aも驚いて、椅子から転げ落ちそうになるも何とか踏み止まる。噛んでた事にも突っ込む暇を与えず、紅い魔女がテーブルを乗り越えて、弟子Aの首を締め上げるようについ先ほど買ったばかりのローブの襟首を締め上げてくる。

「いいいい、今なんてった！？ 今、なんていったんや！」

「うううう、ぐるちい（ローブがのびるう）」

「ぐぬぬぬ！ 良い気味だな。人間よ！」

「ああ、ご、ごめん！？ ほんまごめん！ 堪忍や！」

未だに苦しんでいる魔王の一言が効いてか、我を取り戻した紅い魔女が、弟子Aのローブから手を離すと謝りながらきちんと椅子に

座る。そして、さきほどの事は、なかったかのように一度だけ咳払いをすると、先を促してくる。

「コホン……センタ村言うたな。やっぱこっちの大陸にあったんか。で、その村どこにあんねん？」

何かを焦ったかのように、弟子Aを見るその目には、誤魔化すようならばどんな手を使ってもという、殺気が若干籠っていた。

「うう……えーっと、この町から南方向にある村で、ちょうどこっちの大陸の首都との中間地点ぐらいにあります。街道沿いに行けば半日ほどでつけたは……え？」

その発言が終わる前に、紅い魔女の椅子が倒れ、その席から出口へと一直線へ向かう。

「ほんつまに、悪い！ さっきの言葉は撤回や！ 私……うちは、うちは……ほんまごめん！ どうしてもこればかりは譲れんねん。ここにあるもんは好きなかだけ持ってて良い！ だからうちは、その村に行く。そいつ見つけたら必ず手伝う！ 絶対や、約束するから……ごめん！」

そう言いながら、名も知らぬ紅い魔女は、引き止める間もなくこの部屋から駆け足で退室していった。

その間、弟子Aは何も出来ずただただ、事の成り行きを見守るしかなかった。残された弟子Aは、体が飲み込めないまま少しの間、身体が固まったかのように動けなかった。

「……えええ？！」

気付いた時には、後の祭り。残されたのは弟子Aと左手の魔王。そして、散乱しまくった物ばかりであった。

「あの人間は一体何なんだ！ 手伝うと言えば、撤回。我を置いてどこかへ行ってしまう。まったくもって度し難い人間だ」

既に苦痛がなくなったのか、左手の魔王は、いつも通りの不遜な

態度をその身に宿していた。

「あー……うん」

正直、弟子Aとしても呆氣に取られすぎて、どう魔王に反応していいものか分からなかった。理由が何であれ、協力者が得られるのは歓迎であつたし、あんな素っ頓狂な話を笑わず……多少なりとも、信じる方向で居てくれる人は稀だと思っていた。協力が得られなかったのは、弟子Aも残念すぎるものの、この情報を元に行動が出来るだけでも良しとし、弟子Aに眠る僅かな前向きな精神を動員して何とか、重い腰を上げる事とした。

「まあ、うん。目的地は出来たし、うーん。とりあえず、一旦宿戻ろうかな」

この後、弟子Aは、魔境に置いてある物の中から、お言葉に甘え、何かを拝借してしまおうかという気持ちもあったが、辞めておいた。理由は、既に指輪も貰っていたしという事であつた。しかし、弟子Aは気づいてない。指輪はあくまで、貸すという名目であつた事に。

弟子Aは魔境から脱出すると、自身が泊まっていた宿へと戻り、食堂で、休憩がてら昼食を取る事にした。今後の事を考えていて、味、内容すら覚えていなかった。

食事を取り終わると弟子Aは、西の大陸へと出航する船の時間確認に港へ行く事にした。しかし、この時はまだ知らなかった。港へ向けて歩いている弟子Aを追って付き纏う影が複数あつた事に……。

此度125年8月19日

午後1時過ぎの頃であつた。

世界が闇に覆われるまでのタイムリミット..十二日には変わらず。

第11話：弟子Aの港町での昼の出来事2（後書き）

弟子A現在の装備

武器…なし

防具…カラミティローブ

左手…布に巻かれた魔王（布は脱着可）

アクセ…精神力増強の指輪

所持金…1060G

所持アイテム

ボロボロに破れた布の服？

幾つかの薬草

高級食器一式

ここまでお読み下さりありがとうございました。

少し間が空いてしまいましたが、次回も出来次第投下していきたい
と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9546h/>

勇者早く来て!!!

2010年10月27日01時46分発行